

The Kansai University Bulletin

Osaka, July 15th, 1927—No. 51

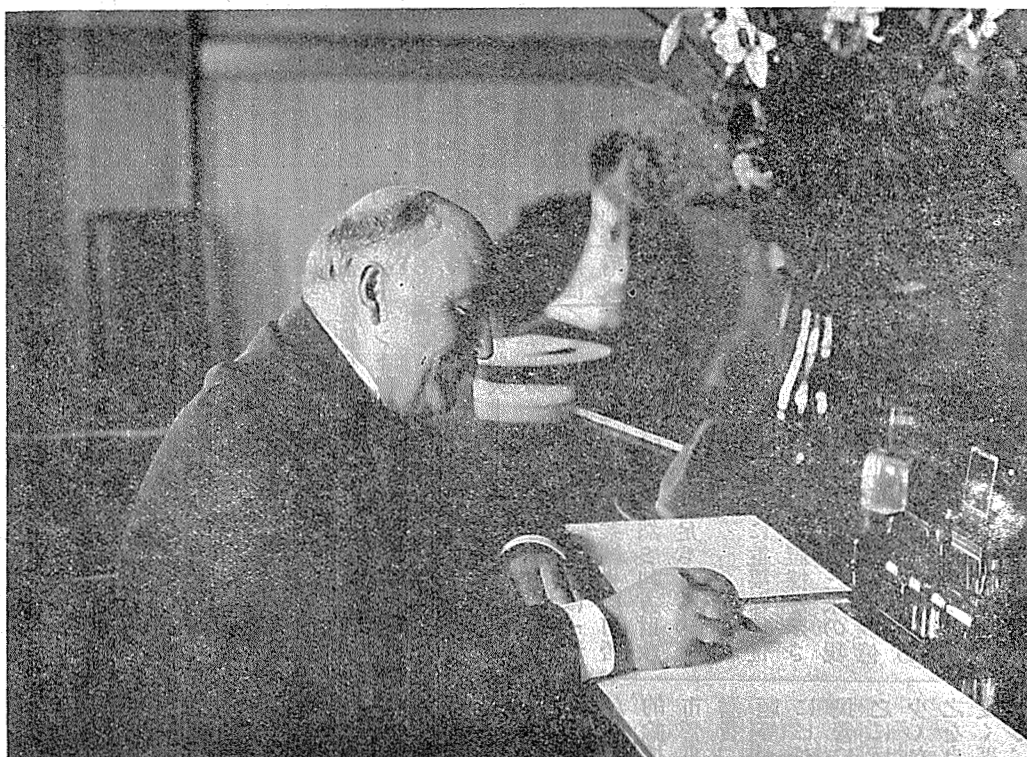
報學山里子

行發日五十月七

號一十五第

年二和昭

His Excellency the French Ambassador M. de Billy's Visit to the University



使大國佛日駐るす毫揮にムバルア念記

阪大

堀佐土話電
番〇七五五・九四〇一

局報學學大西關

座口金貯營振
番五七八二一阪大

千里山學報 第五十一號

目次

挿繪——記念アルバムに揮毫する駐日佛國大使 (表紙)——來學せる佛國大使ド・ビー氏—— ケンブリッジ大學トリニティー・コレッジ圖書 館——佛語劇「下手な英語通譯」の一場面——千 里山學報創刊五周年記念會出席者——來學せる 神戸駐劄ドイツ領事ビショップ氏——新任教練 教官高橋中佐——校友竹井小野右衛門氏——孝 靈帝御陵前に於ける皇陵崇敬會一行——福島 法二旅行俱樂部——近畿中學校相撲大會に優 勝せる和歌山師範學校選手——全國中等學校柔 道大會——福島馬術部員——東西對抗馬術競技 會に於ける本學選手のパンケット飛越——全國 大學專門學校雄辯大會記念攝影——英語劇「ハ ムレット」の一場面	市營事業に就て 大阪市長 關 大學評議員 河村信一 數學の符號 關西大學講師 河村信一 學内報——教員囑任——本館竣工式に於ける住友 合資會社祝辭——昇格五周年記念文藝大會—— 新聞學會創立記念講演會——千里山學報創刊五 周年記念茶話會——駐日佛國大使來學——ドイ ツ文化研究會發會式——フランス地理學者來學 ——第一學期授業終了——第一學期試驗施行—— 第五回夏期語學講習會開催——宮島教授大阪 職業紹介委員に選任せらる——新聞學會會員の 新聞社見學——記念植樹寄附者芳名——高橋中 佐來任——附屬第二商業學校彙報——教授田邊 信太郎氏夫人——評議員後藤武夫氏令息 校友の面影——竹井小野右衛門氏 校友彙報 學生彙報 雜錄——文藝大會印象記 千里山俳壇 千里山歌壇
---	---

市營事業に就て

大阪市長 關
關西大學評議員 關

私が講演の題目として選んだ市營事業に就ては既に種種の方面から可成りの研究が爲されてゐる。従つて只今は市營事業に關する一般の理論を申上げるよりも、寧ろ現在日本の市營事業が如何なる地位にあるか、又はこれに對して下される種種の批評が果して如何なる程度まで當つてゐるか等の問題に就て多少卑見を陳べ度いと思ふ。

市營事業に關聯して第一に考へらるるは地方財政特に都市の財政である。近頃屢財政緊縮の要を説く論を聞くが、これは國費歳計十七億に達する我國の現狀よりして一應耳を傾けるべき論であるかも知れない。しかし財政一般の緊縮を論ずるに當つては國家財政と共に地方財政に就ても充分の考慮を拂ふ必要がある。何となれば今日の地方財政は實に國家財政に匹敵する形大なる數字を示し之を緊縮することなくして財政緊縮の實を擧ぐるを得ないからである。これ今日國家財政の緊縮と同時に地方財政の緊縮が叫ばれる所以であるが實際問題として地方財政の緊縮は頗る困難である。事は即ち市營事業と地方財政との關係に關する。

今日地方財政の歳出入には純然たる公經濟的歳出入の外に事業上の歳出入を含んでゐる。より正確に云へば地方財政には二種の型があつて一は専ら租稅收入に依つて必要な經費を支辨せんとするものであり、他は財源とし

て税外收入に重きを置かんとするものである。今我國の地方財政全體に就て云へば總歲入の六〇パーセント餘は税外收入が占め租稅收入は僅かに三〇パーセント餘を占むるに過ぎぬ。更に市制を施ける我國百餘の都市に就て見るとは税外收入八三パーセント租稅收入一七パーセントと云ふ率を示してゐる。従つてこれ等の市を除く他の町村の財政は主として租稅に依つて賄はれてゐることがわかる。

税外收入を主たる財源とする地方財政の特徴は所謂六大都市に於て一層顯著なる、即ち大正十四年の調査に依れば之等の都市の租稅收入は歳入總額の約一二パーセントであつて約八八パーセントは税外收入に依つて占められてゐる。而かも其税外收入中の大部分は諸種の使用料——即ち電燈、電車、水道、瓦斯等の事業に依る收入——である。従つて之等の都市の財政は市の營む諸事業を縮少するにあらずば之を縮少するを得ぬ。されば一般に地方財政緊縮の問題は公營事業縮少の可否論にかかわる。これを離れて漫然と地方財政の緊縮を論ずるは少くも甚だ足らざるの議を免れない。

市營事業が地方財政に於て如何に重要な地位を占めつつあるか云ふ今一つの證據を示さう。夫は地方債の額である。大正十三末の現在に就て見るに我國地方債の總額は約拾壹億圓に達してゐた。其中主たるものは市債である。即ち約七億貳千萬圓は百餘の都市の市債であり、他の町村債が約壹億圓、貳億圓餘が府縣の負債である。換言すれば地方債總額の三分の二は市債が之を占むる。更にそれらの市債中約六億圓——地方債總額の約六〇パーセント——は六大都市の負債であつて、六大

都市の市債の大部分を占むるは東京、大阪二都市の負債である。これに依つて觀るに近時地方債が甚しく膨張したと云ふことは取りも直さず大都市の負債が増加したと云ふことになる。ここに於て問題が生ずる。何故に斯くの如く大都市の負債が増加するかの問題である。

思ふにこれらの負債は都市が仕事を生ずるから生ずるのである。會つてドイツの一市長は云つた「公債を起さない都市は活動しない都市である」と。これは至言である。即ち地方債が増加すれば地方團體の事業が増加し、事業が増加すれば歳入が増すと共に歳出も亦増加する。故に地方行政費緊縮の可否は又公營事業就中市營事業縮少の可否にかかると。

一般に市營事業が是なりや非なりやに就ては種種の論がある。且つ又公共的福利 Public Utilities を目的とする事業に就て市營が可なりや民營が可なりやも企業論に於て尙ほ定説がない。諸説中市營事業を非なりとする一般論は次の如くであらう。

市營事業は經營が一般に放漫であつて資本の濫費、浪費が多いのみならず當局者の腐敗問題等が屢起る、且つ市營は民營に比して遙かにビジネスライクでない、事業は須くこれを民營に委すべしと云ふにある。

之に反して又市營事業を擴張せよとの議論も少なくない。曰く市が多量に必要とする財貨は之を自給するに如くはない、民間より供給を受く事を廢し自ら之を生産供給することに依つて、生産に依る利益を市の金庫に收めよ、例へば道路舗裝用の木塊の如き之を民間の商人より購入するより市が自ら山林を所有して生産すべし、又吸石が必要ならば市が自ら石

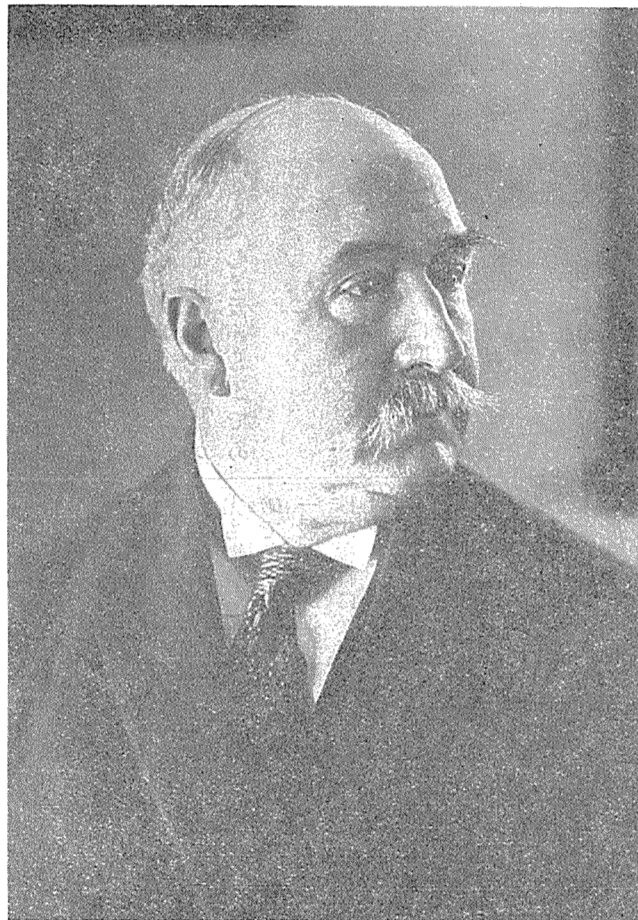
切山を經營して自給すべしとの論である。これらの問題は之を科學的に一層深く研究するの價值がある。市營事業が一概に不經濟なりとの論には固より嚴密な科學的基礎があるわけではない。と同時に必要品自給論も更に周密なる検討を要する。少くも今日まで市營事業に關するこれらの問題に就ては満足すべき科學的研究あるを見ない。従つて市營事業の及ぶべき範圍、經營方法等に就ては定説を稱すべきものがない。以下これらの點に關し少く愚見を述べて市營事業を如何にすべきかの問題に對する豫論をなし度い。

二

先づ市營が民營に比して不經濟なり云ふ主張の根據は、經營の衡に當る市吏員が民間會社の當事者に比し營利心の衝動に動かさるるこゝ一般に少く、爲めに民營に比し市營は不經濟浪費に陥るこゝ多し云ふにある。この外に市營が不經濟なり云ふ大なる論據はない。

しかしこの點に就き第一に考ふべきは市營事業が多く公益的、獨占的事業、所謂 Public Utilities に屬する事業である云ふことである。即ちこれらの事業は個人の手に依つては能く經營し得られざる事業であつて、たゞこれに民營を許すとしても大株式會社が若しくは之に類する大規模企業に依るにあらずんば經營するを得ない。然らば大株式會社等に於ける當局者が事業の經營に當つて營利心に動かさるるこゝ市吏員よりも果して強いであらうか、之は甚だしく疑問であると思ふ。同學上田貞次郎博士は最近の著書に於て「市營事業を攻撃するに當り營利心の缺乏を以てす

るは全然然を外れてゐる」云はれてゐるがこれは正にその通りであると思ふ。殊に最近に於ける財界の事實——例へば頻頻として曝露せらるる大株式會社の内情や、企業破綻の原因やを眺むる時、民營事業經營の局に當る者が其事業遂行上營利心の衝動に依つて動かされるこゝは、市營事業の當局者に劣るこゝも勝るこゝは云ひ得ないであらう。



氏一イビ・ド使大國佛日駐るせ學來

のであらうか。上田貞次郎博士は「公共事業は特許を附して株式會社に經營せしむるが可なり」この見解をこられるやうである。私は別に之を批評せんとは思はないが此主張は確かに傾聴に價するものがある。現にアメリカ等に於て特許 Franchise を與へて私的企業に公共事業の經營を委してゐる例は極めて多い。我國にも其例

以上は公共事業に就て市營と私營との長短を比較したのであるが、斯かる事業の經營組織には尙ほ特許會社——私營會社に特許を與へて經營せしむるもの——と最近ドイツに於て盛になつた混合經營——市と民間との資本を合同して經營する結合組織——とがある。これらの經營組織を我國に移して以て行ふことは果して如何なる程度の効果を擧げ得るも

がないではない。しかし今日まで我國で此組織が成功し來つたか、又將來成功し得る可能性があるであらうか。私は少くも過去に於ける成功の例は誠に少いと思ふ、又將來を考へても市と事業會社との所謂報償契約に關する問題は益々複雑多岐になつて行き成功は覺えないと考へる。蓋し特許會社の制度が成功を見ないのには相當の理由がある。一例を電氣

事業に三つて見やう。云ふまでもなく電氣事業の如きは現に急速に進步、發展しつつある事業である。斯かる事業に對し僅僅數十箇條の契約を以て將來長期間に亘りよく公益を保護し得るであらうか。恐らく幾年を出でずして契約締結當時には豫想せざりし新規の發明や改良が起つて來るであらう。爲めに會社は餘計な契約條項に邪魔せられて充分の活動發展が出来ず、市では又意外の方面に監督や公益保全の手落ちがあるこゝを發見して處置に窮するが如き狀態を惹起する。従つて兩者間に徒らなる紛争を多くするのみで該事業の充分なる發達も期し得られなければ、公衆の利益も完全に保護するを得ない。勿論之に對して契約改訂の道はあるが事實問題として此契約改訂が爾く容易に行はれ得ざるは吾人が日常目睹するところである。ここに於て特許會社のこの弊害を矯正せんが爲め特許條件を伸縮的にすべき必要が認められて來た。この一方法は公益事業委員會制度である。即ち市又は其他公共團體に依つて特に任命された委員會が時に應じて事業會社を監督し特許條件を定めて行く云ふ組織である。而してこの特許會社に代ふるに公益事業委員會を以てする云ふ傾向が最近アメリカに於て特に顯著であつたことはアメリカに於ける特許政策の變遷として人の既に注意するところであるが公益事業委員會制の成否は一に其委員中に適任者を得るや否やに依つて分かれる。而かも其適任者を得ることは可成り困難であると思はれる。何となれば委員の職に當る人は其監督すべき事業に對して相當精通せる上に、常に公益を念する高潔なる人格を有するこゝを要するが故である。これを要するに現在我

國に行はれつある特許制度は尙ほ種種改良の餘地はあるにしても、將來其運用よろしきを得るや否やは大なる疑問である云はねばならぬ。

次にドイツに於ける混合經營の狀態如何と云ふに一例を市街鐵道にすれば、戰前に於ける企業數は私的會社が一三三、市營が一三三であつたに比し、戰後には私的會社六五、市營一〇五と云ふ風に何れも減少してゐる。これらの企業形態に於ける減少は即ち公私混合の企業増加に依つて償はれる筈であつて、その増加の數は正確にはわからないが兎に角相當の増加を示してゐるであらうこゝは前記の統計より略之を推察し得る。

さてこの混合經營は公私の資本を合せ、公私のメムバーより成る共通の一取締役會の如き機關を設けて之を執行機關とし、一は以て市の財力に及ばざる資本を集め、一は以て市が自ら事業を經營するの手續を省かんとするものであつて、其企圖するところは市にまつて誠に都合のよいものであるが、この組織が果して成功するや否やは寧ろ將來の問題に屬する。従つてこれに對する研究は今後益なされるであらうが、只今私の感を卒直に述べるならば、斯くの如き複雑な組織が我國に於て圓滿に實効を擧げて行くやは頗る疑問であると思ふ。この關係は例へば市長と市參事會との關係に觀ても思半ばに過ぐるものがある。

即ち我國の市町村制は略歐洲大陸諸國の例にならつたのであるが、其中ドイツでは我國の市參事會の如き複数の機關が行政執行の機關であつた。ところが斯かる組織は我國ではうまく運用せられない。其結果アメリカ等に見る所謂 Mayer and Council System の如く執行

機關を單數とし市參事會の如き複數の機關は之を議決機關とする組織が採用せられた。最近では更に市參事會の權限を縮小して市長の諮問機關の位置に置くが如き改正さへ行はるに至つてゐる。斯かる點より觀る時公私混合の複數的執行機關に依つて運営せられねばならぬドイツ流の混合經營組織が我國に於て果して美果を收め得るや否やは大いなる疑問であらうと思ふ。

以上を要約して私の大體の結論はかうである
即ち市營事業に對する一般の批難は當らぬ云ふこと、及び特許會社、公私混合經營等の組織の可否は更に之を深く研究するを要するも、我國目下の狀態としては市の直接經營が單純で最上の方法なるべし云ふことである。

三

次に私は市營事業の範圍に就て若干の考察を試み度い。新事業を市營の埒内に取り入れるに當つては勿論慎重の考慮を要する。さればさて市營事業の範圍を無暗に狭く限るのも一概に策を得たものと云ふことが出來ぬ。然らば如何なる程度に市營事業の範圍を止むべきか之が問題であるが此問題を系統的に論ずる爲めには企業の本質論と我國の現状との二點より考ふるを要する。先づ前者に就て述べ度い。

企業の本質論より市營事業を如何に見るべきか、營利心の發動なる點に於て夫が株式會社と同列に置かるべきものなることは既に述べた。彼のマーシャルは其著“Trade and Industry”の中に於て市營事業の得失はこれを株式會社の利弊中に併せ論じてゐるがこれ

は確に卓見であると思ふ。即ち企業としての市營事業の本質は株式會社の夫に準すべきものである。そこで企業の本質論より見たる株式會社の特質は何であるか云へば企業の所有と執行即ち *Unternehmensbesitz* 及 *Unternehmensleitung* の完全なる分離である。別の言葉で云へば資本家と企業家との地位が全く異なる人に依つて占められる云ふことである。

極めて一般的な觀念に従ふに資本家と企業家は同一のものの如く解せられるが、近代的の企業を論ずるに當つては兩者は嚴に區別して考へねばならぬ。これを區別せずしては現代の經濟現象を充分理解することが出来ない。

尤も歴史的に見ればこの兩者は曾つて一のものであつて資本家即企業家であつた。それが一般經濟の進歩と共に漸次分離して來て遂に株式會社に於て兩者の分離は殆ど頂點に達した觀がある。しかし市營事業に於てはこの特徴が一層顯著にあらはれてゐる。ここに於て問題となるのは資本家と企業家を結び付ける紐帶如何である。例へば個人商店等に於ても企業的所有と指揮とが全然分離してゐる。こゝがあるが、その場合營業の所有者たる主人と實際經營の衡に當る支配人なり番頭なりとの間は個人的、即ち Personal な情誼に依つて結び付けられてゐる。然るに企業規模が大なるに従ひこの個人的情誼は段段薄らいで來て資本家並びに企業家に各獨特の心理狀態が發生し來る。而してこれら二個の心理狀態は全く異なるものであつて所謂資本家氣質と企業家氣質とは寧ろ正反對の傾向を有する。英語では元來 Capitalist 即企業家であつて特に企業家をあらはす言葉はなかつた、近頃用ひら

れる Entrepreneur なる言葉は寧ろフランス語の Entrepreneur に出づるが、兎に角 Capitalist が Entrepreneur ならざることは、彼のウォーカー Walker も云へる如く、武器を多量に有せる者が大將軍にあらざるの同理である。

資本家心理と企業家心理の主たる相異點は資本家が先づ利益を得ることを目的とするに反し企業家が事業を目的とする點である、即ち資本家は先づ何よりも利子を勘定する、損をしないやうにこそ考へる、従つて保守的であり引込思案に陥り易い。然るに企業家の目的とするところは事業そのものであつて、事業より得られる利益は寧ろ第二の問題であり。従つて進取的であり冒險的であつて時には利害を度外視して事業を營まんとする。最近我國の大商店が破綻をして經濟界に大きな破綻を描いてゐるが、その主腦者であつた人の遺り口を見るに全く事業が目的であつて利害成敗は問題外であること云ふ企業家氣質を如實に示してゐるやうに思はれる。企業家を動かす動機はさうまでも營利ではなく創造即ちCreationである。近年我國に勞働問題がやかましくなつたのを見て或人は「こんなに勞働問題が面倒になつて來れば寧ろ工場を處分して公債を有たうと望む人が増加しはしないか」と云ふことを云つたが、これは正に資本家心理の表白であつて企業家の心理とは區別しなければならぬ。而してその人は又「世の中に必要なるは斯くの如き種類の人ではなく眞に働くところの人である」と云つてゐる。

資本家と企業家との相違は國に就ても見られる。フランスは人も知る如く資本家國である。フリートで衣食する所謂 Rentenstaat である。(1)

れに反しアメリカは企業家國である。アメリカの恐るべきはその豊富なる天然の資源にあらずしてその旺盛なる企業精神である。即ち事業の經營に當つて常に新式の方法を採用して倦むを知らざる努力である。こゝはアメリカに於ける産業隆昌の原因を調査せんといはるる海を越えて調査に來つたイギリスの二技師がその報告書「高き賃銀の秘密」"The Mystery of High Wages"に述べてゐるやうである。

株式會社乃至市營事業に於ける責任感の缺乏は全く相反する二の形であらはれて來る。第一は執務に彈力性がなくなり因循姑息であつて仕事らしい仕事をしない云ふ傾向である。繁文縟禮、官僚主義云ふやうな弊害はこゝから生れる。第二は經營が大膽になつて綿密な思慮分別を俟たず冒險的に仕事に當まれる傾向である。一企業内に於ける下の方の階級に屬する人人の間には第一の弊害が生じ、企業の主腦者たる地位に立つ人人は第二の弊害に陥り易い。殊に公的職務にある人が選舉等の關係で任期を限られてゐるやうな場合には所謂功を急ぐ結果第二の弊害を極端にあらはすことが屢ある。

斯くの如く資本と事業の分離は株式會社の企業的特質であるが市營事業も亦同様である、何となれば市營事業は普通公債を通じて得たる資金を以て事業を営むからである。而かも株式會社では經營の方面と同時に株主關係即ち資本關係の方面も顧慮せられるが、市營事業に於ては常にその經營方面にのみ注意が拂はれて資本關係は殆んど閑却せられてゐる。それだけ市營事業に於ける資本と事業との分離は甚しいものである云ひ得る。

然らばこれらの缺點を如何にすべきか、詳言すれば資本の供給者、事業の執行者との分離對立するところが國民經濟上の一進歩であつてこれあるに依つて大企業も可能なりとせば、この分離對立をそのままにして置いて而かもこれに伴ふ責任感の缺乏なる弊害を除去するが爲めには如何なる方策を講ずべきやの問題である。私は再びマーシャルに従つて、社會の歴史的過程の中に何等かこの缺點を補ふに足る發展傾向が存しないであらうかを檢して見度い。

資本家と企業家との對立及びその相反的心理傾向が互に相俟つて一般經濟の發達を促すことは既に述べた通りであるが株式會社乃至市營事業の短所は又實にこの點に存する、何ぞや、曰く事業經營上に於ける責任感の缺乏これである。即ち自己の資本を以て事業を営む場合、經營そのよろしきを得るや否やは直接自己の損益にかかわる。他人の資本を以てなす場合にはこの事が無い。近時屢見られる株式會社に於ける大きなスキャンダルの原因は大部分こゝにあると考へられる。

第一に考へ得ることは時勢の進歩に伴ふ道德觀念の發達である。第十七、八世紀頃のイギリスに於ける大貿易會社が展示したやうな大スキャンダルは多くは當時の社會的道德水準が甚しく低かつたことに歸因する、今日支那に於て株式會社組織の企業が成功せぬのも同一の原因に歸し得られるであらう。従つて社會の道德的水準の向上に伴つてこの缺點は少くも一部分取除かれて行くものと考へられ

る。

第二に資本と經營との關係が個人的ではなくなつた、Impersonalになつて來たことに就て個人的情誼に代はるものは所謂團體精神である。マーシャルの例に倣ふならばこゝに居られる諸君は等しく關西大學の一構成分子たることに精神上の責任と誇りを感じて居られる即ち人の爲めにはなく一組織の爲めに働く、或ひは一事業に従事してゐることをプライドとする云ふのであつて、この觀念がなければ市營事業の如きは發達せぬ。事業の發達はやがて人の爲めになるのであるから、組織の爲め事業の爲めに働く云ふことは間接に人の爲めに働いてゐることになる。これらの點より考へて何處かの市に疑獄でも起れば直ちに國中の市吏員が凡て腐敗してゐるやうに騒ぎまわる今日一般の傾向を私は甚だあきたらなく思ふ。問題はもつと深いところにある、目先の事實や不道德に眼を蔽はれて一時的な市政の刷新や市營事業の改廢を叫んだところで問題は毫も解決されない。社會一般がより深く精神的、道德的に覺醒して、その向上が圖られるにあらずんば問題の根本は依然こゝのまゝに残る。

要するに公益事業は之を公營に云ふのが私の主張である。而して今日まで日本の市營事業は大體に於て健全な發達を遂げて來た。無論幾多の缺點あるは免れないところであり、改善すべき餘地も極めて多いに相違ないが、これに對しては科學的研究が必要である。又自己の仕事に對してプライドを感じるが爲めにも先づその仕事を知らねばならぬ。しかし自ら仕事の衝に當る者には却つてその地位がわからぬものである。故にこの點からも市

營事業を別箇の機關に依つて詳細に研究する必要がある。幸いこれらの研究に依つて市營事業の本質、長所、短所が明瞭にせられたならば、長所は益之を發揮し、短所は之を改善して以て市營事業そのものの隆盛が期待せられると同時に、こゝに始めて事業市營の理論的根據が築かれ得ると思ふ。

附記 以上は過般來講せる大阪市長關一氏の講演の既略である。編者が要領の速記を基として書き上げたものであるから文責は固より編者にある。

あさぶすま

關西大學講師 堀 正 人

麻衣ややさむき夜にけり雨ふりやみて
ただ虫のこゑ

くれなるのさくろの玉の照り明るこの園のひ
るしづかなるかも

ながめやる北山並は色づきて峰のへに雲のか
かる日ぞ多き(洛北眺望)

裏山の父の墓のべ冬さりて松のみ青くなり
けるかも

岡のべの枯生におふる玉松に日影あかるくな
りしこのごろ

み寺のまがきの梅は花いまだ咲かねぎ枝に日
ざしかがよふ

印南野の晝たけけれや庭鳥の長鳴くこゑのの
ぎにきこゆる

町筋のはたてに見ゆる山のいろ夕かたまけて
いまださむしも

雨雲のこのごろ重し里のべは梅も大かた散り
すぎにけり

數學の符號

關西大學講師 河村 信 一

序

複雑を簡單にし、煩瑣を輕便にするは、何時の世、何處の人にも共通の思想で又一般の計畫である。地圖に使用の三角や圓の符號、製圖に用ひられる長短の線列、或は學生ノートの略字から八百屋の符號、數へ擧げたら際限が無いであらう。文字を書く代りに略符を用ひ、略字を見て本字を想起する。諸種の科學書には屢略符を用ふるこがある。化學では一定の記號で結晶形を示しては居るが、數學では之れ等より符號を用ふる事が甚だ多い。實際學問で符號を最も多く使ふのは數學であらう。加減乗除の符號は小學校の時代から教へられ中學に至つては數の代りに a b や x y を教へられる。此の a b x y も亦一種の略符である、之れ等を集めて作つた數學は取りも直さず略符の權化である。數學を少しも知らない人は我が丁度速記の字を見たり、楔形文字を見たり、梵字を見るのと同じ緒であらう。 a b で既知數を表し、 x y で未知數を示すのは Descartes の創案であるが、(後出)見馴れた文字であるだけ其使ひ方を會得しやすい。其他の字は云へ無い符號即ち $+$ や $-$ (或は $=$) $<$ $>$ なぎは其形が異様であるだけ始めて使ひ出した人は、別段の勇氣と決心が無くしてはならぬ事を推察する。此點支那で文字を作り出した時の苦心を思ひやられる。此れ等奇異の符號は始めから其通りであつたか或は數度の改變の結果一般に賛成採用せられたもので

あるか等に就て文献の徴すべきものは甚だ少い。唯種種の書物に散見する此等の史的記述を拾ひ集め、之に予が愚考を混じて次の短篇を綴つた。材料蒐集の不徹底、考察の不充分は識者の叱正御示教を乞ふ次第である。

一 加 號

科學史の發達を見るに、人類が人間らしく成つた時、即ち其捕獲した動植物を貯藏する考が起り、或は毎日の日月星辰の廻轉を認めた時、既に數へる云ふ事が起り、從て數の觀念が生じて居たものと考へねばならぬ。之に依て語こそ異れ一に一を加へて二、又一を加へて三といふ様な語は中古から使はれて居る、數へる云ふ事を知つた人間が始めて得た算法は加法である云へよう。

ユークラテスミテグリスの間の豐饒なる溪間は、人類文明の發祥地の一と云はれて居る。ナイル川の邊ピラミットミスフィンクスに昔の榮華を憶ふ埃及の地は古代數學の發達地の一と唱へられて居る。甲に生れた楔形文字に於ても乙に用ひられた象形數字に於ても別段加法の記號を認める事は出来ない。唯數字を連記して之に加法の意味を持たせて居る。十を顯す符號二つを並べて二十、更に之に一を顯す符號三つを連ねて二十三を示して居る降つて希臘に於ても六百七十八を表す文字を連記して六百七十八を表して居る。 $(\text{XCVIII} \times 1000 = 70777)$ 現今帶分數を表すのに、整數と分數とを連記して其和を用ひて居るのは古の記法の名残を留めて居るのであると云はれて居る。羅馬數字の記法も之れに甚だ類似して居る。お月様の年の十三七つ、一六銀行の使ひ方等も亦此の例と云へよう。然

し之れ等は何れも唯數字の書き方から加法の記法を考へたもので加法の運算を書き表したものは云へぬ。多分古代に何と何と加へて幾つになる等云ふ事は云はず其答を直ちに連記法で書いたものであらう。即ち加法云ふ程の計算法は存在しなかつたと考へるのが至當であらうか。

Diophantus は四世紀の頃、其盛名を唱へられ有名なる世界最初の十三卷の算術書 (Arithmeticon Liberum A. D. 300) を作つて不定解析の基礎を作つたのである。が其希臘語で書かれた原本は久しく所在を失ひ僅かに Hypothesis の増補譯に依て大體を知る事を得たもので、十六世紀の中頃 Vatican Library で缺本が発見された位であるが、加法の符號として連記を用ひたものらしい、但し減法の符號としては後に述ぶるが如き符號を用ひたのである。

歐洲暗黒時代の間に、亞利比亞人は希臘の數學書を集め之を譯し註を付した。Euclid の Elements が歐洲に始めて輸入されたのも亞利比亞語であつた。此等の數學書は Pisa の商人 Leonardo に依つて伊太利に先づ輸入されたのである。Leonardo は其青年期を Barbary に暮し、九つの數字に依て計算する印度法を學び後商業上の用件のため埃及、シリア、希臘及びシシリーに旅し、其間各地にて數學的研究を窺ひ遂に千二百〇二年算術書を著し、後千二百二十八年訂正したるものを發表した。古代 Diophantus 以來の數學が歐洲に輸入せられた最初のものである。其後伊太利數學界は甚しき活躍を致したのであるが、印刷術は未だ發明されず尙幼稚の域を脱しなかつたが、幾何學、代數學の初歩は既に知つて居つた。

然も符號の使用は當時未だ行はれず僅かに plus の意味に用ひた位であつた。

Lucan de Burgo 又は di Borgo (1445—1514) は Lucas paccioli, paccioli paccioli 等とも書かれて、Leonardo に次ぐの數學者であつて、印刷した世界最初の數學書 Summa de Arithmetica を千四百九十四年に初版を出し、千五百二十三年に再版を著して居る。此書は算術書として主要なものであるが、略符の使用に關しては尙不充分であつて、計算中の語なきに速記的の略字を用ひた位の事であつた。當時加法の印しには plus の意味で p に横線を入れた p を使用した。

Nicols Tartaglia (1499—1557) は加法の符號に ϕ を用ひた。古代印度に於ては加法の略字として yu を用ひた、之れは $yuta$ の略である。

十五世紀末には伊太利商人間に取引量の過剰の意味で $+$ を用ひられて居たが、獨逸及英國の代數學者も algorism といふ算法を採用せし時より既に $+$ を用ひ signum additorium と稱し量の超過を顯すに使用し或は所要の量より幾何少いと云ふ意味にも使用した。

$+$ の符號は p から轉化したとも云はれるが寧ろ其頃の寫本手記本に於て et を走り書きにしたのから轉化したと考へる方が良しからう。

Francis Vieta (1553—1603) は、佛國の數學者で新紀元を作つた人であるが $+$ を加法の略符として用ひ $-$ を減法の略符として用ひて居る。其以前にも用ひた人も有つた様であるが尙一般に用ひられ無かつた Vieta の發明も一般に採用せらるる事は甚遅遅たるものであつて其廣く用ひられる様に成つたのは獨逸人の功績甚大なるものがある。

John Widmann は、其算術書を Leipzig に於て千四百八十九年に出版したが、印刷した書物中に+及-の符號を記載したのは此の書が最古のものであつた。彼は+を通例の加法にのみ限らず、一般の意味 et 又は and を含ませて居る。例へば "regula augmenti + decrementi" の表題の様な使ひ方をも爲して居る。此の中の+は確かに et の轉化で最初は et と書いてあつたのであらう。(一)號は減法を表すに用ひられて居るがいつも用ひては居らない。"plus" という語は彼の書物には發見されない。"minus" は唯一三個所使用されて居る。千五百二十一年に成つては Vienna 大學教授 Heinrich schreibes の Grammatheus の算術書に於て規則正しく加法及減法の符號として+及-が用ひられて居る。

彼の門下 Christof Rudolff は、獨逸語で書かれた第一の代數書を千五百三十五年に出版したが矢張+-の符號を用ひて居る。Michael Stetel 又は Stetelius (1486?-1567) は、十六世紀の最も大なる獨逸代數學者であるが千五百四十四年ラテン語で Arithmetica integra と云ふ本を出版して居るが加法の符號として+を採用して居る。かくて順次一般に使用せらるるに至り千六百三十年頃からは之を用ひ無い人は、殆んど否全く無いと云つても良い様になつた。

二 減 號

Diophantus は減法の符號に希臘語を逆にし尖頭を缺いたを用ひた。印度人は減數の上に點を附して之を表した。伊太利人は、代數學に略字を用ひ始めた時から、一般に minus の頭字 M 又は m を用ひ或は直線を以て其中央を貫きこして用ひて居つた。十四世紀頃に減法の略字として meno といふ語を用ひて居る。pacioli は demptus の略字 de を以て、減法の意味を顯して居た。此の如く一定の符號を用ふる事無く甚不統一であつた。Vieta は二數の差に = を用ひたが、英國の Oughtred は - を用ひた。(後出) - を Signum Subtractionum と稱して用ひ出したのは Widmann であつた。始めは+と同じく商業上に單なる符號として用ひられたものである、或る獨逸學者は+の縦線を除去して-號を作つた云はれて居るが m からへに變じ更に(-)に變じたものさ考ふる方が正當であらう。Descartes の時代に於ても、文字は唯正數を表はすのみであつたが、千六百五十九年 Johann Hudde (1633-1704) は始めて負數をも表す事にした。

三 乘 號

印度人は二量の相乘の意味に、其二量の語の次に bha (bhavita = 積) と書いた、例へば yā

ka bha = x x y (yā = x ka = y) である。これと同じく歐洲に於て減法には多く符號を用ひず言語にて書かれたものらしい。

Edward Wright が、千六百十八年に發行した Napier の Mirifici logarithmorum Canons descriptio の譯本中にある著者の匿名の「附録」中には乗法の符號として X が書かれて居る。右の匿名著者は多くの點から Wright らしい云はれて居る。William Oughtred (1574-1660) は倫敦に近き Albury の僧正であつたが、有志家に無料にて數學を教へて居た特志家である、其門下には John Wallis 及び天文家 Seth Ward 等の秀才を擧げる事が出来る。彼は數學記號の使用に關し甚熱心に之を鼓吹し百五十種の符號を作つた、其中の三つは今尚使用されて居る、即ち乗法の符號たる x、比例の符號たる : 差の符號たる ~ である、千六百三十一年に出版した Clavis mathematicae には此の符號が使用されて居る。Thomas Harriot (1560-1621) 等 Oughtred



館書圖ジツレコ・イテニリト學大ジツリブムケ

に先だつ英國の數學家であるが其死後に出版された Artis analyticae praxis 1631 には乗法の符號として點を用ひて居る、然し此の記法は一般の注意を惹かなかつたが René Descartes (1596-1650) は之を採用し、Gottfried Wilhelm Leibniz (1646-1716) も亦此の記法を用ひて居る。十八世紀に至り Halle 大學教授で Leibniz の衣鉢を繼ぐものゝ自負して居た Christian Wolf (1679-1754) に依り一般に用ひらる様になつた。

此の當時 (:) は乗法の記號にも、比例の記號として今の (:) の代りにも、又小數點にも用ひられ甚だ紛然たるものがあつた、之に關しては千六百九十八年七月二十九日 Leibniz が John Bernoulli (1667-1748) に寄せた書翰の一節を參照して Leibniz の態度を知る事が出来る「予は乗法の符號として x を好まない、何となれば夫は x と紛れ易いからである。予は屢二量間に一點を置いて乗法を表して居る。」

四 除 號

古代西部亞利比亞に於ては、除法の記號として a-b, a/b の様な分數の形を用ひて居た又印度に於ては (a/b) の様に中央に引かるべき横線を省いた事もあつた、Leonardo は分子分母の間に一線を引いて分數を表はす方法を輸入して居る。

此の符號をば Oughtred は點を以て表した。即ち A:B::C:D を書く處を A:B::C:D と書いた、此の書き方は廣く用ひられて英國及大陸にも行はれたが千六百五十一年には英國天文家 Vincent Wing が (:) を使用し始め (:) は小數點として使用せらるる様になつた、此の頃大陸では猶舊符號を用ひて居たらしく前記 Leibniz の書翰の續きに次の言葉がある。

「之に依て貴下の比例の記號 $\frac{x}{y}::\frac{a}{b}$ に於ける、比を顯す一點を予は二點をなし $\frac{x}{y}::\frac{a}{b}$ と書く此の二點は又除法をも表はす、何ごなれば比と除法とは同じ意味を有するからである」

兩比の等しい事を示す(=)の符號は、千六百三十一一年 Oughtred が創作したものであるが、英人 John Wallis (1616—1703) の力に依り一般に用ひられる様になつたのである。

除法の記號の $\div$ は (:) を結合したものである。之を初めて用ひたのは瑞西の Johann Heinrich Rahn であり Teutsche Algebra Zurich 1659 に記載して居る、尤も此の以前に (:) を以て除法を表した事もある云ふが明らかで無い、Rahn の著書は Thomas Brancker の譯書に依り千六百六十八年に英國に輸入されたのである。

五等號

印度に於ては相等の略號として pha を用ひた之は phalam の略である、pha $\frac{57}{11}$ yu は $\frac{5}{1} + \frac{1}{7} = 1\frac{1}{7}$ の事である。u は加法の意(前出) (5) は (1) で整数は 1 を分母とする分數として表はすのである。

Vieta の時代でも今の等號は用ひられて居らぬ。

Robert Recorde (1510—1558) は Cambridge の數學教授で又實際醫家であつた、當時醫者は療法と同時に數學、星學、鍊金術及化學を學んだものである。彼は英國最古の代數書 The whetstone of witte (1557) を著したが其中に $=$ を用ひて居る、之は彼の創意であつて此の符號を用ひた理由としては、「二つの事柄の内二つの平行線は等しいものはない」と云ふのである。

ふのである。獨人 Xlander は千五百七十年(=)を等號として用ひた。

比例に於て用ふる $=$ は Leibniz の創意である。其以前は $::$ を使用して居た。

Hieronymo Cardao (1501—1576) は、等號として $=$ を用ひた、Newton 以前には $\propto$ 又は $\sim$ の様に右又は左を少し明けて書いて矢張等號に用ひた事があつた、之はラテン語の equals の二頭字から轉化したのである云はれて居る。

六不等號

($>$) 及び ($<$) の不等號は Thomas Harriot に依て作られた ($\approx$) 及び ($\cong$) は一世紀後に於て巴里水路學者 Pierre Bouguer に依つて始めて用ひられた、 $\neq$ は Christoffel から始まつた。

七根號

印度人は平方根を表すには、數字の前に Ka を書いた。之は Karana (irrational) の略字である。例へば Ka 15 $= \sqrt{15}$ 。Tartaglia は、千五百五十六年に $\sqrt{}$ を用ひて居る。例へば $\sqrt{R} \sqrt{28 \text{ men}} \sqrt{R} 10 = \sqrt{28} - \sqrt{10}$ 。R. v. は “Radix universalis” の意である。

Christoff Rudolf は、十五世紀に著した原稿に於て、數の前に置かれた點は其數の平方根を求むべき事を示して居る、其後此の點は變化して $\sqrt{}$ になつた。此の符號は Michael Stifel も亦使つて居る。

八括弧

Christophorus Clavius (1537—1612) は、法王グレゴリー十三世に建議して曆を改正させたジュゼップ教徒である。千六百〇八年

括弧を創作したが、其後フランダース人 (Flemish) の教學者 Albert Girard (1590—1633) は其千六百二十九年に書いた著書 Invention Nouvelle en Algebre に之を使用して居る。然し數字の上に横線を書いて括弧の代りに用ふる事は Vieta の創意である。

Oughtred は括弧を用ひずに、一括すべき數の兩端に $::$ を附した。例へば $N(A+E)$ は $N(A+E)$ と書いた。然し此の最後の二點は之を省いた事もある。

九小數點

Simon Stevin (1548—1620) は、白耳義 Bruges の人であるが、科學の各方面に功績があつた殊に小數に就て彼の著書 La Disme (1585) は貴重なるものである。彼は 5.912 を 5912 又は $5^{\circ}9^{\circ}12^{\circ}$ と書いた。Oughtred は千六百三十一年に .56 を $\frac{56}{100}$ と書いて居る。

十七世紀の始め迄は、小數の書き方は進歩しなかつた。瑞西の Joost Bürgi (1552—1632) 獨逸の Johann Hartmann Beyer 等に依つて小數を用ひられ順て小數點又はコンマの使用も始まつて來た。然し小數點を眞實の使用法に基きて確立したのは John Napier (1550—1617) に歸せなければならぬ。彼は蘇格蘭の Baron of Merchiston で對數の發明者である。彼は千六百十七年其の著書 Rabbologia に小數點を使用して居るが、直ちに一般に採用せられなかつた事は Oughtred の記法が尙行はれ、千六百五十七年に至つても John Wallis が同記法を用ひて居るのでもわかる。然し十八世紀に至つては一般に Napier 式が用ひられる様になつた。

一〇特數

∞ は前掲の如く、始めは等號として用ひられたのであるが John Wallis (1616—1703) は千六百五十五年 Arithmetica Infinitorum を著し其中に無限大の符號として之を用ひて居る。 π を始めて用ひたのは Oughtred である。彼は $\frac{1}{37}$ 及 $\frac{355}{113}$ 即ち圓周と直徑との比の略近値を π なる符號で表した。此の符號は彼の Clavis mathematicae の千六百四十七年英語版に書かれて居る。此の符號は採用され Isaac Barron (1630—1677) に依て廣められた。 $\approx$ は 3.14159... なる符號は William Jones が千七百〇六年其 Synopsis palmariorum matheseos に用ひたのが始めである。後 Leonard Euler (1707—1783) が千七百三十七年に同符號を用ひてから一般に使用される様になつたのである。 e を自然對數の底として用ひたのも Euler で千七百二十八年である。 i を以て $\sqrt{-1}$ を表すのも、矢張 Euler が千七百七十七年が始めてであるが之は後に Karl Friedrich Gauss (1777—1855) が Disquisitiones 中に用ひた事に依て一般に廣められたのである。 x を以て未知數を表すのは Descartes が、其 La Géométrie 中に千六百三十七年に使用したのが始めである。既知數に a, b, c を用ひたのも亦同人である云はれて居る。

一一函數

函數の定義を與へたものは Leibniz である。彼は函數の記法として天文學の符號を用ひた。 (x) は千七百十八年 Jacob Bernoulli が使用し、後千七百三十二年 Alexis Claude Clairant (1713—1765) も亦之を用ひて居る。其他の F

π等の符號は Euler が始めて用ひた。

導函數の符號としての $y' = \frac{dy}{dx}$ は千七百五十九年 François Daviet de Foncenex が其 Miscellanea Tourinensia に記し居る。 $F(x)$ の記法は Joseph Louis Lagrange (1736—1813) に始まり、 $Df(x)$ の記法は Augustin Louis Cauchy (1780—1857) に始まり、 D_{xy} の記法は Louis Arbogast (1759—1803) に始まる。

偏微分係數の符號として $\frac{\partial}{\partial x}$ を用ひたのは Carl Gustav Jacob Jacobi (1804—1851) であつた $\frac{\partial}{\partial x} f(x, y, z, \dots)$ 或は f_x を用ひたのは A. Knesen である。

dx 及 f の記號は Leibniz が既に用ひて居る以上は主として代數學に使用される符號を述べた。此外尙遺漏したものも少なく無い又他の分科——例へば幾何學等に於ても常用の符號がある。すべて之れ等に就て述べる事は之を他日に譲つて一先づ打切る事にする。

結

現在數學に用ひられる符號略符は、これで全部を盡して居るかといふことは云へ無い。廣汎なる數學國は日に其未耕地を開拓して居る順て新しい符號は續續として大家小家に依て創作し使用し傳播されて居る。中には簡にして明理想のものもあるし、又餘りに多數の條件を一括せんとするが爲めに、反りて繁雜の極は書寫の誤、印刷の謬を生じ、全體の論文の主旨を五里霧中に迷はすが如きものもある。符號は要するに略符である。萬人に容易に理解せしめる事を主眼とすべきである、徒らに各種の書體、大小の文字を上下左右に集合せしめて欣欣たるが如きは數學の

本義に悖るものでは無からうか。前記の小篇中に於ても、符號の一般化に對する先人の苦心の一端を窺知する事が出来るであらう。この苦心を今の世今の人に Extrapolate する必要があると思ふのである。

商店の符號は甲乙の店に於て全く相異なる事もあらうし、又有つてもかまはないが、數學の記號に、こんな事があつては誠に困却する國際聯盟を俟つ迄も無く國境無き科學界に使用する符號の用法が處により人により異なることすれば甚しき矛盾であつて之を忽諸に附する事は出来ない。前掲の如き根本符號は既に普遍的使用の時期が長いから、此の様な事は無いが、新開地の方面には全然無いことは云へない、甲の學者は甲自己の符號で始終し、乙の學者は乙自己の符號を作つて之を襲用し、其間に何等の連絡も相談も無い、然も甲乙の兩論文は甚密接の關係があるといふ場合には、之等の論文を読む第三者は、其主旨を理解する苦心以上に、符號の了解に多大の勞力を盡さなければならぬ。特に數學の應用方面に關する著作には此の傾が多い様に思はれる。之は各國の學者が世界的に會合し、無限大の寛容度を以て互に妥協、讓歩、合同、聯盟等の函數たる會議を開く事が出来たら其容易に解決される事であると思ふ、順て其成功の確率は正に一であると思ふのである。

複雑を簡單にし、煩瑣を輕便にする爲めに作らるべき符號が、反りて誤解の基となり、紛糾の源となる。此の世は遂に住みにくい世で、住みよい世にしようと思つても出来ないものであらうか。嗚呼兎角人の世は住みにくい。

學 內 報

教員囑任

最近招聘した講師諸氏左の通りである(順序不同)。

學 部	
經濟學、貨幣論	法學士 作田 莊一
統計學	經濟學士 蜷川 虎三
經濟學史	經濟學士 森 耕三郎
保險學、損害保險	法學士 野口 正造
行政法	法學士 佐治 謙讓
佛 法	法學士 前島 熊吉
金融論、銀行論	經濟學士 瀧澤 喜子雄
大學豫科	
英語	文學士 堀 正人
同	法學士 前島 熊吉
漢 文	文學士 高橋 盛孝
地 理	文學士 中村 良之助
體 操	經濟學士 若松 新吾
專 門 部	
漢文、支那文學史	文學士 高橋 盛孝
保險學	法學士 野口 正造
文學概論	文學士 河盛 好藏
英語、劇研究	文學士 豐岡 佐一郎
國 語	文學士 平林 治德
行政法	法學士 佐治 謙讓
英文學史	文學士 堀 正人
東洋經濟事情	內 田 壽
貨幣論、銀行論	經濟學士 瀧澤 喜子雄
民事訴訟法	法學士 箕田 正一
英 語	法學士 前島 熊吉

經濟地理、商品 經濟學士 中村良之助
經濟政策、外國貿易、外國爲替 勝田貞次

本館竣工式に於ける 住友合資會社の祝辭

去る六月五日舉行せられた本館竣工式に際し同館寄贈者たる住友合資會社から祝辭を寄せられ、同社常務理事小倉正恒氏が式場に於て之を朗讀せられたことは既報の通りであるが、右祝辭の全文を左に掲げる。

本日關西大學昇格五周年に當り本館竣工式並びに圖書館起工式を兼ね昇格記念の式典を舉行せらる。予其席末に列し一言祝辭を陳ぶるは洵に光榮とするところなり。

凡そ社會の進歩は物心兩界の發達に俟つ。而して物質文明の伸展は精神文化の指導により而めて其成果を見るべきものなり。由來我大阪は本邦商工業の淵藪にして軌近其發達殊に著しきものあり。然れども文教の發達未だ全く之に伴はず其施設尚缺くるところあるは眞に遺憾に堪へざるところなり。此間關西大學は明治十九年關西法律學校として創立せられしより既に四十有餘年華城教育機關の先達として精神文化の發達に貢獻す。其功績大なりと謂ふべし。宜なる哉、曩に昇格せられて大學となり最高學府たるの榮譽を荷ふ。爾來茲に五星霜今や諸施設成り本館も落成し圖書館亦起工せられ教授其人を得學生既に五千を超え益々其隆昌を加へんす。寔に慶賀の至りに堪へず。推ふに本學は學の實化、大學の社會化、國際心の涵養を以て其教育を爲す。之實に時勢の要望に適ふものにして殊に商工都市たる我大阪に於ける大學の方針として極めて

文藝大會順序

第一部

一音樂 スペイン風狂想曲 サルベッティ作
學生音樂部員

適切なるものと謂ふべし。加之本學は私立大學として自由清新の氣風を以て著はれ現代教育の風潮に合す。之本學が嶄然として頭角を表はす所以なり。冀くば職員各位並びに學生諸君各精勵以て本學教旨の達成に努力せられんことを。

本日竣工の式を舉行せらるる本館は之元住友合資會社の館舎にして曩に住友合資會社より本學に寄贈せられ今茲に移築工事完成し其面目全く一新せるを見る。而かも舊時の面影依然として尙存す。往時を懷ひ轉感慨に堪へざるものあり、幸に本館が本學中樞の棟宇として利用せられ以て我邦文教の向上に資するところあらば寄贈者亦與て餘榮ありと謂ふべし。聊か蕪辭を連ね以て祝辭とす。

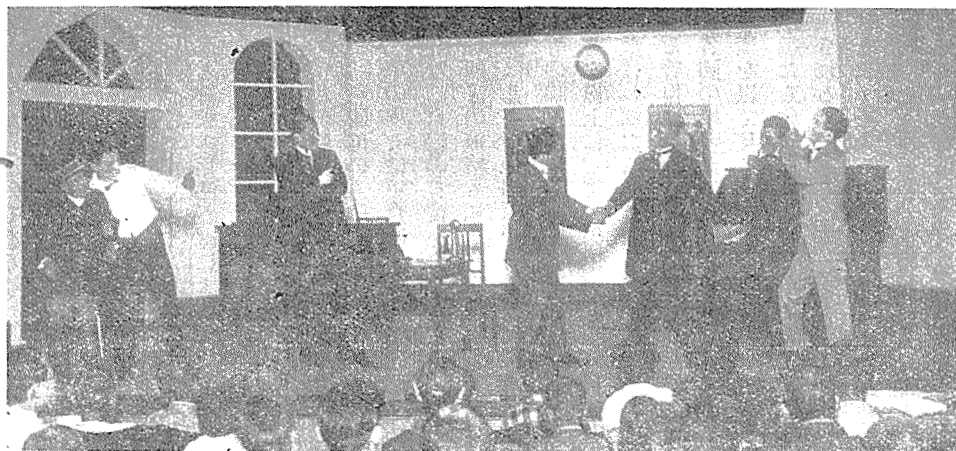
昭和二年六月五日

住友合資會社常務理事

小倉正恒

昇格五周年記念文藝大會

既報本學昇格五周年記念文藝大會は去る六月五日、圖書館起工式、本館竣工式並びに昇格五周年記念式の後を受けて午後一時から千里山學舍本館講堂に於て開催せられた。定刻前既に來賓始め學生其他の觀衆に依つて場内は一の空席も餘さず、開け放された窓からは初夏の風が吹入つて爽快である。會は次のプログラムに従つて進行した。音樂、暗誦、演說、劇等純眞な學生の演出振りは何れもそれぞれ聽者、觀者の心を捉へたが殊に諷刺曲仕舞、英語演說、佛語劇、英語劇等は滿場の喝采を博した。斯くて英語劇「ハムレット」を最後として盛況裡に薄暮散會した。



面場一の[佛語劇]「ハムレット」

二邦語演說 價值論に立脚して思想運動の方向を論ず 白川惠宣(豫科三)
三獨語演說 現代の獨逸 三好虎雄(豫科二)
四邦語演說 現代社會思想の我民法に及ぼせる影響

響

五音 樂 千鳥の曲 (尺八)

萩原精治(學部法二)
白井敦典(學部法二)
上田喜三郎(學部法二)
谷内武助(豫科二)
目良道篤(豫科二)

六語 曲

謡曲同好會員

鶴 龜(素謡)

福田俊一(豫科三)
木村喜英(豫科三)
鳴尾芳太郎(豫科三)
森井忠吉(豫科三)

松 山(一調)

加納憲介(豫科三)
寺田伴嗣(豫科三)
奥田榮太郎(豫科三)
平井梅一(學部法二)

八 蜘蛛(仕舞)

西山良一(豫科三)
羽淵博(豫科三)

七獨語演說

ヤンキー紳 羽淵博(豫科三)

八英語演說

見えるものと見えぬもの 山口辰雄(學部法二)

九音 樂

地獄谷の一夜ジュリアン作 學生音樂部員

一音 樂

第二部 マンドリン・オーケストラ 學生音樂部員

(イ) 舞 曲 フローレンスの夜

マチョッキ作

(ロ) スペイン風小夜曲

美しきカステリヤの女 マチョッキ作

ハ田 園 幻想 曲村の祭典

ジュリアン作

二邦語演說

轉換期に於ける機軸階級

三獨語暗誦

ローレライ ハイブリット・ハイネ作

四佛語暗誦

難破 加藤昌秀(學部法二)

五獨語對話

軍人ミ田舎者 天川高信(學部法二)

六佛語劇

下手な英語通辯 ツリスタン・ベ

ジュリアン

水下尙武(豫科三)

通 辯

上野俊彦(豫科三)

新聞學會創立記念講演會

ホクソン……………八島治一(豫科三)
ホテルの主人……………中村淳一(豫科三)
警 部……………山下 昶(豫科三)
巡 査……………淺見寛二(豫科三)
ガルソン……………藤枝貞雄(豫科三)
ガルソン……………淺見寛二(豫科三)
ショーファー……………大谷綱郎(豫科二)
七英語劇 ハムレット シェクスピア作
ハムレット……………倉橋巖二(學部法三)
ホレーショ……………服部 實(學部法二)
レーヤチーズ……………彦田利一(豫科三)
王 妃……………吉木由雄(豫科二)
王……………福部 章(學部法三)
殿 上……………武田太七(豫科二)
オスリック……………辛島 甫(學部法三)
從 者……………數 人

關西大學新聞學會は大阪朝日新聞社事務取締役上野精一氏を迎へて去る六月十七日午後三時から千里山學舍本館講堂に於て創立記念講演會を催した。定刻上野氏は佐々教授の紹介にて壇上に立ち「英國總罷業と新聞紙に就て」なる題下に約一時間に互り縷縷として説くところあり聽衆を啓發するところ多大であつた閉會後本館入口にて新聞學會會員と共に記念の撮影をなし午後四時半辭去せられたが、右講演の要旨は次號に於て紹介する豫定である。

千里山學報創刊五周年記念

茶話會

去る六月は恰も本誌創刊五周年に相當するので、これを記念し併せて本誌の將來に對する意見を交換する意味に於て、同月十八日專任

教授講師其他關係者を招き正午千里山クラブハウスに於て茶話會が催された。定刻バルコニーにて記念撮影をなしたる後卓に就き官島事務理事の挨拶、辰巳學報局主任の挨拶其他數氏の感想論等あり各自懇談を交へて午後二時過散會した。

因に發刊以來専心編輯の衝に當り來つた辰巳經世氏はこの度五周年を機として其主任たるの地位を退いたが尚ほ依然として編輯其他に就き必要な指導を與へることになつてゐる。尙當日の出席者は左の諸氏であつた。

岩崎卯一、今山實、大立目重虎、加藤金次郎、河盛好藏、武内省三、辰巳經世、中村良之助、歌橋千秋、野村次夫、前島龍吉、松崎義盛、小泉幸治、櫻井匡、佐々穆、木下孫一、宮島綱男、新町徳之、霜村盛郷、樋口純、森川太郎(イロハ順)

駐日佛國大使來學

新任佛國大使オペール・ド・ビー氏Robert de Billeは去る六月二十一日本學を來訪し教職員學生等の歡迎を受けて一場の挨拶をなした。當日佛國大使は午前七時十八分梅田驛着、宮島、佐々兩教授、賀來講師、田川秘書の出迎を受けて大阪ホテルに入り暫時休息の後午前九時新大阪特別電車にて千里山に向つた。本學に來着するや先づクラブハウスにて少憩、次に本館に入り學生音樂部のラ・マルセーエーズの奏樂に迎へられて講堂に入り、學生の能樂八島ミ土蜘蛛に打ち興じた。次いで宮島教授登壇、歡迎の辭と共に本學は最初佛法を教授する目的を以て建設せられたるものにして傳統的に佛國との因縁淺からず、先年詩人大使クローデル氏、今亦更にド・ビー大使を迎へて前述歴史的緣故一層深きを加ふるを喜

ぶと述べ、これに對して大使は次の如く答禮した即ち本館のサロンに於てデュギイ教授の寫眞に接し會つて同先生に親炙して居た當時のこころを回想して感慨無量なるものがある抑も法理の學問は人類生活の統一的規律を研究する學問であつて結局人類生活の歸趨にかかわる。故に苟くも身を法學の研究に委ねる者は國の如何人種の如何を問はず人生の理想を共通に仰いで人類永遠の平和と融合を招來せしむるが爲めに力を致さねばならぬ私は日佛兩國がこの目的の爲めに一層緊密に協力一致せんことを望んで止まぬ。

大使が降壇するや本學軍事教官高橋中佐の發聲にて一同フランス共和國の萬歳を三唱し、大使は亦同様に我が帝國の萬歳を應答した。斯くて音樂部の學歌奏樂裡に會を閉じ大使は再びラ・マルセーエーズに送られて退場、特別應接室にて記念の揮毫をなし感激に溢るる面持ちにて本學を辭去、時に午前十一時賀來講師は天神橋筋六丁目まで見送つた。

因に大使の來學に際し特別電車の運轉其他種種便宜を計られた新大阪鐵道株式會社に感謝の意を表する。

ドイツ文化研究會發會式

かねて本學内に設立せられてゐる關西大學ドイツ文化研究會は爾來會員の募集其他の諸準備が着着整つたので去る六月二十三日午後二時三十分から神戸駐劄ドイツ領事ビショップ

氏 E. Bischoff を迎へて其發會式を開催した。定刻關係教授講師、學生等出席、ビショップ氏は大立目講師に迎へられ特別應接室にて小憩の後學生音樂部の奏するドイツ國歌を聞きつつ入場した。野村講師先づ立つて本會設立の過程を述べて開會の辭に代へ、次いで宮島



千里山學報創刊五周年紀念會出席者

る所以であるこの意味を述べ挨拶をなしビショップ氏を紹介した。氏は神戸のドイツ總領事館を代表して本研究會が設立されたことは日獨兩國間の文化的連鎖を一層密接ならしむるものであつて將來益健全なる發展を遂げんことを希む旨を述べ大立目講師之を翻譯した次に野村講師はゾルフ大使より寄せられたる祝電及び本會の設立に就て種種便宜を與へられたイリス商會支配人ゴースンズよりの祝電を披露し、尚ほ大立目講師、櫻井教授、前島講師亦立つて感想を語り盛會裡に午後三時半閉會、ビショップ氏はクラブ・ハウスにて少憩の後辭去した。因に當日寄せられたゾルフ大使の電文左の如くである。

Dem Verein zur Forschung deutscher Kultur an der Kansai-Universität in Osaka sende ich zu seiner Eröffnungsfest meine aufrichtigsten Grüsse und wünsche seiner Arbeit viel Erfolg. Ich freue mich, dass es der Initiative der Kansai-Universität vor allem der unermüdeten Rührigkeit des Professors Miyajima gelungen ist, ein solches Institut aus eigener Kraft ins Leben zu rufen. Osaka hat damit einen erneuten Beweis geliefert, wie das Zusammenwirken von Handel und Wissenschaft den Blick über die Meere lenkt und die studierende Jugend zum Verständnis der Kultur anderer Nationen geeignet macht. Der Verein kann meiner Unterstützung und Förderung stets gewiss sein.

SOLF

右抄譯

大阪關西大學ドイツ文化研究會發會式に際し私は茲に深甚なる祝意を表するに共に將來その事業が大なる成果を収めんことを切望するものであります。私は斯かる研究會が、關西大學の御發意特に宮島教授の熱心

なる御奔走に依つて卒先大阪に成立したるここに對し衷心喜んで居る次第でありますこれに依つて大阪は次の如き更に新しき實證を示すものであります。即ち(大阪の)商業(ドイツの)學問が遠く海を越えて相互に相呼應協力し、同時にそが青年學徒をして他國民の文化を理解するに容易ならしめたのであります。私も本研究會を援助獎勵するに常に吝かならざるものであります

ソルボンヌ大學を卒業しアグレゼ Agreze (大學教授たり得る)の資格を有するフランスの小壯經濟地理學者エチエンヌ・デンヌリイ氏 Etienne Denney は其研究旅行の途次、去る六月二十七日來學、クラブ・ハウスにて少憩、教授講師數氏と種種學問上の談話を交へたる後宮島教授紹介の下に經濟學部第三學年の教室に於て英語を以て人口問題に關する一場の講演を試みた。

フランス地理學者來學

本學第五回夏期語學講習會は例年の如く左記に依り福島學舎に於て開催せられることになった。
一會期 自七月二十日至八月十日
二聽講者 男女を問はず入會を許し、女子聽講者の爲めには特別席を設け、尙ほその數多き時に別に女子部を置く。
三組織 英語、佛語、獨語の三科を置き英語科は中等學校卒業以上の素養ある者を、佛語及び獨語科は何れも初學者を收容す

四授業時間 各

科共午後六時より八時まで

五課程 英語科一譯解、佛

語科一發音、譯解、文法、

獨語科一發音、譯解、文法、

六講師 本學專任教員中左記諸氏が擔任する。

英語科 教授櫻井匡氏、助教松田一氏

佛語科 講師德尾俊彦氏

獨語科 教授中村部次郎氏

第一學期教授終了



氏フツヨシビ事領ツイド部駐戸神るせ學來

表してゐる。

記念植樹寄附者芳名

本學專任教員團が本學創立五周年記念事業として校庭に記念植樹を行ふことに決したこと、は既報の通りであるが、其後該資金の寄附申込者並びに金額は次の如くである。

二〇口 壹百圓也 松本 丞 治氏
五口 貳拾五圓也 小泉 幸 治氏
五口 貳拾五圓也 佐々 穆氏

陳ぶるを以て其主たる機能とするものである。
新聞學會會員の新聞社見學
關西大學新聞學會會員約三十名は去る六月二十五日午後三時北區堂島大阪毎日新聞社前に集合、増子幹事先導の下に大阪毎日新聞社及び大阪朝日新聞社の新聞製作の状況を詳細に見學し大いに得るころがあつた。見學後參會者一同は大阪朝日永井瓢齋氏を始め先輩數氏を加へて中之島公會堂地下食堂に於て茶話會を開き、新聞に關する種種の談話を交へ薄暮散會した。
因に這般の見學に際し種種便宜を圖られた大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社に對し同會では深く感謝の意を表してゐる。

五口	貳拾五圓也	櫻井 匡氏
五口	貳拾五圓也	宮本 英 修氏
五口	貳拾五圓也	鳥賀陽然良氏
五口	貳拾五圓也	原田鹿太郎氏
四口	貳拾圓也	賀來 俊 一氏
三口	拾五圓也	齊藤常三郎氏
二口	拾圓也	森下 政 一氏
二口	拾圓也	中村 部次郎氏
二口	拾圓也	今 山 實氏
二口	拾圓也	原口 亮 平氏
二口	拾圓也	德尾 俊 彦氏
二口	拾圓也	加藤金次郎氏
二口	拾圓也	河盛 好 藏氏
二口	拾圓也	野村 次 夫氏
二口	拾圓也	堀 正 人氏
二口	拾圓也	樋口 純 氏
五口	貳拾五圓也	大立目 重 虎氏
三口	拾五圓也	松 田 一 氏
二口	拾圓也	武内 省 三氏
二口	拾圓也	吉田 貞 雄氏
六口	參拾圓也	新町 德 之氏
五口	貳拾五圓也	岩崎 卯 一氏
一口	五拾圓也	宮島 綱 男氏
七口	參拾五圓也	田邊 信 太郎氏
二口	拾圓也	中村 良 之助氏
二口	拾圓也	千賀 鶴 太郎氏
五口	貳拾五圓也	野村 吉 藏氏
五口	貳拾五圓也	木下 孫 一氏
一口	五拾圓也	池尾 芳 藏氏
三口	拾五圓也	田川 七 郎氏
三口	拾五圓也	松崎 義 盛氏

(以上昭和二年七月一日現在)

第五回夏期語學講習會開催

大學豫科 自七月七日至七月十四日
專門部 自七月十三日至七月十五日

本學年度第一學期試驗左の通り施行せられた。
學部各科各學年 七月九日限
大學豫科各學年 七月二日限
專門部各科各學年 七月九日限

高橋中佐來任

既報新に本學教練教官に任ぜられた、陸軍歩兵中佐高橋爲一郎氏は過般來任せられたが、本誌の請に應じて左の如き就任の辭を寄せられた。

御挨拶

私は今回命に依り此の學風高く名譽ある大學に勤務することを得ますのは誠に光榮に存じます。殊に學德厚く名望高き學長並びに諸先生の御指導に浴しつつ意氣激瀾たる學生諸君と俱に教練の研究に心身の修練に勵む事を得ますのは仕合せとして喜悅に堪へません。ご時同に尙ほ私は私の責務の關係する所大なるものあるに顧みて其任の甚だ重きを痛感するのであります私は將來益私の心に鞭撻し専念本務に努力するに共に各位の御援助に依りて此の任務を完ふ致し度い覺悟であります。幸に私の微衷を諒せられ自今格別の御懇情を賜はらむことを切に御願する次第であります。



佐中橋高官教練教任新

の青年辯士は交立つて熱辯を揮ひ聴衆亦これに和して頗る盛會であつた。審査の結果、一等佐藤雄太郎君(天王寺商業)、二等堅正一雄君(關西甲種商業)、三等伊藤盛弘君(大阪貿易)の諸君受賞し木下主事の手より賞品を授與せられた。尙ほ宮島關西大學事務理事、佐々、櫻井兩教授を始め本校教諭も多數參會したが、佐々、櫻井兩教授はそれぞれ一場の挨拶を試みた。第一學期試験施行 本校第一學期の授業は各學

年さも七月五日を以て終了し、同八日より十三日に亙り第一學期試験を施行した。

教授田邊信太郎氏夫人

本學教授田邊信太郎氏夫人咲氏は豫て京都にて病氣療養中のところ去る六月七日逝去超えて十一日市内北區天満寺町天德寺に於て葬儀が営まれた。謹んで哀悼の意を表する。

協議員後藤武夫氏令息

本學協議員後藤武夫氏令息富夫氏は去る大正

十一年渡歐ベルリン大學に於て研究中罹病昨年七月歸朝後鶴沼別荘に於て療養中の處七月十日逝去、享年二十九、同十二日高輪泉岳寺にて告別式が営まれた。謹んで哀悼の意を表す。

綠蔭微風

M. I 平

支那のある詩人は吾は夏日の永き愛す言ふたが、夏を愛するものは實際は少ない、春を愛する詩人は多い、秋を傷む麗人は少ない、冬を厭ふ老詩人はある、だが夏に親みを持つものは南國人以外にはないと言ふても過言でないと思ふ、夏になる私はシンガポールのスコールを思ひ出す、毎日午後二時か三時になるころ一片の暗雲が天際に現はれる、スコールがくるなと思ふ間もなくその片雲が見る見る内に擴つて地上の人類を威壓する、斯様な文句がし、ミゼラブルの中にあつたと思ふ、海より偉大な眺めがある、それは太平洋である、太平洋より偉大な眺めがある、それは大空である大空より偉大な眺めがある、それは人間の胸底であると言ふのである、ジャンヴァルジャンが市長の職を擲つて自首しようかそれさも百里の命を寄せられたコゼットを保護しようかと思ひ煩ふくだりである、少し話が外れてしまつた、人間の胸奥の事は今暫らく措く、大空が人間を威服することはすばらしいものだ、その擴つた密雲は沛然とした大雨になる、天地萬物はその前に懾伏しなければならぬ、その雨足の太いこそ、椰子の葉もゴムの葉も頸垂れる、龍舌蘭さへ悲鳴を擧げる、街さういふ街は人の影を絶つ、天地萬物が大空に蹂躪せられるのである、併しその跡が

氣持がよい。忍従の快感を呼ぼうか、一時間か二時間の後に雨があらがるさ赫した南國の太陽が照り渡る、するさ大粒の雫が椰子の葉からポツタリポツタリ落ちるのが眞珠より美しい、香りの高いシガアを片手に眺めてヴェンダの藤椅子に腰を掛けて居る、スマトラやジャヴァの蘭が幽かな匂ひを送る、此時ウィスキーに炭酸水があれば猶好い、夏の涼味も夏の詩趣もシミジミ感じられるのである、私は或る時斯様な歌を作つて見た「スコールせんミラツカの海に波立てば椰子の林に風そよぐなり」久方の天の河せも落つるごシンガポアの雨は降るなり」もさより商人の歌である上手からう筈がない。夕自動車に椰子の樹ゴムの樹交りの林間に馳る、或は降りて歩遅遅、綠蔭微風語り月明紅砂を照らす、あんな事が一度あつても悪くないと思ふ。雨で思ひ出したが印度のモンスーンには全く驚いた、七十日は今朝から晩まで晩から朝まで降り通すのだから初めていつた奴は呆れてしまふ。毎朝起きて見るさ靴は微だらけだ、ポリーこそ好い面の皮で手入をするに忙しい、コンボからマドラスに出る時マツラ大野を通つた時は暑かつた、大體私は冬より夏がよい、寒いのが好きなのだがあの暑さには恐れ入つた、天竺のマツラ大野の眞砂石の如きかけろひするもさやつて見たがものになつては居ない。斯様な暑い目を見たのだから日本の夏はお茶の子さいさいだと思ふて歸國して見るさ矢張り夏は暑いから不思議なものだ、夏になれば綠蔭が戀しい、涼風が戀しい、だが夏は決して悪むべきものではない、何んだかまきまりがつかぬ様だ。

校友の面影

▲公證人 竹井小野右衛門氏▼

明治四十三年法律學科出身

一日筆者は南區八幡町の竹井公證人役場に氏を訪れ、氏の職務上に関する感想を叩いた、氏は極めて謙讓な態度で徐ろに左の如き意見を述べるところがあつた。

×

私は明治四十三年の春關西大學を出て、後上京し、中央及法政に籍を置いてゐました。山岡萬之助先生の研究室に、神戸の濱野鐵太郎氏などと一緒に通つてゐたのも、その頃のことです。大正十年に辯護士試験に合格して、東京の或る法律事務所で辯護士の仕事を暫くしてゐましたが、色々考ふるころがあつて公證人にならうと思ひました。私は大正十一年に公證人たることの任命を、司法大臣より受けたのですが、その時、東京で某大審院判事に、公證人は代書人の親方位のこさだと言はれたことがありました。

然しその後の實務に當つた経験から考へるに全くさうこのみは言へない。

公證人は一種の公吏で、公證人法の第一條に明示してあるやうに、法律行為並にその他の私權に関する證據となるべき證書を作るのがその仕事であつて、まあ行政法上の一種の營造物、例へば公園のベンチのやうなものであります。それで一般に代書人の親方位に考へられるやうな譯でせう。然し一般の民衆に適合して、その取引に適應する個個別別の證書

を作らなければならない。然も法文解釋その他の力も勿論必要ではあるが、特に複雑なのは手續上の繁文縟禮であります。その上社會の色々な取引は絶えず進展して、手續法上の極めて嚴密な監督拘束を受けなければならない公證人の仕事は、程さやうに單純容易ではない。

然るに日本の公證人制度が比較的に發展してゐないで、ややもすれば社會取引の進展に伴ひ、その取引の正確なる證書作成に役立ち難いことは事實であります。その理由に就いて考へて見るに、何も公證制度そのものの必要が無い譯ではない。公證制度は事件發生以前に法律行為並に私權の歸屬するところを明確に證書に作成して他日の紛争を未然に防止し又は、假りに紛争の生じた場合に於ても、確實、正當に是非を司直する證據となる證書を作るものであつて、この制度を社會が要求することは今更喋喋を待たないところでありませう。それで現在の公證制度に對して感じられる不滿の原因を考へて見るに、公證制度に関する諸規定が餘りに窮屈過ぎるに、公證人が餘り消極的な態度でその職務を行つてゐる嫌ひがあつて、その爲に一般社會人が公證制度を言ふものをよく理解してゐないこと、及び當局が公證制度を利用する方策を講じない嫌があるのではなからうかと思ひます。



氏門衛右野小井竹

規定が窮屈過ぎる言ふのは、公證人の仕事は要するに全部規則固めになつてゐて、公正證書作成の方式に違へば直に微戒裁判に附せられ或は譴責に見舞はれる。同時にその證書も公正證書たるの効力を失ふ。従つて何時も手續様式に拘泥して、私法の實體規定の研究を等閑にする嫌があります。故に證書作成に當つても當事者の囑託した事項の核心に觸れず、極微温的な證書を多く作るやうな譯である。でこんな證書をもつては實際に争が生じた際に法律關係の解決をすることが出来ない

場合がある。即ち公證制度本來の使命を果さぬやうな場合があるのであります。

從來の公證人が消極的態度で仕事をしてゐるに、これは手数料の如きも役場内に於ても役場外に於いても大差なき爲に、外出を嫌ふ傾向があり、社會に出て仕事をしない關係上社會の要求するやうな仕事が出来ない、單に從來の習慣として一部金貸業者、遊廓業者、或は土地建物に関する賃貸等極くありふれたもののみに限られて居ります。私權に関する

事實の證書作成等眞に社會の要求するものを作らない爲に從來代書人位の仕事を甘んじてゐた、従つて社會人も餘り信頼してゐない。更に公證人には廣告、宣傳等をするに、公證手續上禁じられてゐる（これは同職間の競争を避ける爲であらうが）、自然その仕事か消極的になるのは明である。又公證人の仕事を當局は隱居仕事視してゐるはしないか任命も判檢事辯護士及び公證人試験に合格した人となつてゐるが公證人試験は今廢せられ、辯護士からなる人は極く稀である。

大抵は判檢事の老年者から任命されてゐるやうな有様であります。元より多年官職に在つて智識經驗共に練達の人人であつて、その能力を云云する譯ではありませんが、働き盛りの時期を他の仕事に従つて過して來た人と言ふ感じは争はれない、寧ろ辯護士諸君の中には新らしき意見や抱負を持つてこれから仕事を始めやうと言ふ人も極めて多いことであるから、その中から任命を見るやうになれば考へます。

公證人自體に於て消極的態度で仕事に従ひ、當局も亦公證人の仕事を隱居仕事視してゐる傾きがあるにすれば、活きた社會取引に適應してその機能を充分に發揮することは難しいことである。

×

氏のお話は盡きない。氏は更に公證人制度設定の本義を説き、新らしき人を大いに任用し監督規定の改正を計り、法の實體研究の餘裕を與へて進歩したる社會に適應した公證制度の活用を計ることは刻下の急務であるに結んだ。擱筆するに當り氏の健康を祝し今後益活動制度の爲に盡されむことを祈るものである。

校友彙報

商交會創立總會

今回大正十五年度專門部商業學科出身者をもつて商交會を組織し去る六月二十五日午後六時より心齋橋つるや食堂に於て同會の創立總會を兼ね懇親會を開催した。當日は左記の通り出席者あり、別項の通り會則を定め本年度の幹事及會計係推薦の上同八時過盛會裡に閉會した。

出席者——石田曾次、濱田喜一、戸田清一、香西政一、武田熊太郎、中村耕郎、栗原清、安岡通、福永俊郎、藤井憲治、藤井藤一、粉川岩一郎、淺野繁雄、阪口信司、三輪典四郎

商交會會則

- 一、本會ハ商交會ト稱シ關西大學專門部商業學科大正十五年卒業生ヲ以テ組織ス
- 一、本會ハ會員相互ノ親睦ヲ計リ嶄新ナル智識及思想ヲ交換シ以テ人格ノ向上並ニ共同ノ福祉ヲ増進スルヲ以テ目的トス
- 一、本會ハ毎年二回(春秋)例會ヲ催ス、但シ都合ニ依リ臨時總會ヲ開催スルコトアルベシ
- 一、本會ノ會費ハ例會ノ都度ソノ實費ヲ徴收ス、但通信費トシテ毎年金壹圓也ヲ前記總會ノ際納付スルモノトス
- 一、會員名簿ハ年一回是ヲ發行ス
- 一、本會ニハ幹事及會計二名ヲ置キ前記各項及ツノ他ノ事務ヲ擔當セシム
- 一、幹事ノ任期ハ一ケ年トシ毎年後期總會席上ニ於テ次年度幹事ヲ選舉スルモノトス
- 一、本則ハ總會ニ於テ出席者ノ過半數ノ同意ヲ經ルニ非ザレバ是ヲ變更スルコトヲ得ズ
- (附記) 本會ノ事務所ヲ大阪市西區北堀江通一丁目

目一八番地濱田喜一方ニ置ク。(電話新町三〇三五)

昭和二年度幹事、淺野、阪口、濱田、香西、石田、戸田、會計、藤井、中村

校友動靜

光行龍生氏(大一五專法) 先般神戸高等商船學校の職を辭し青島に赴き光陽硫化燐工廠に入社された

大隅末廣氏(大一二法) 從來大阪港西新聞社編輯長として勤務中の氏は同紙昭和國民新聞に改稱と共に港區東田中町八丁目の本社に移轉主筆兼編輯局長に就任された

和田恒雄氏(昭二大經) 大阪歩兵第八聯隊第七中隊一年志願兵として入營

谷田諸十郎氏(明三九法) 今般大邱地方法院檢事に榮轉された

山崎峯雄氏(大一大法) 今般葉子夫人との間に長男峯照君を擧げられた

岡田英臣氏(昭二專法) 今般戸畑鑄物株式會社大阪營業所に入社された

松本市太郎氏(昭二專法) 豫てより勤務中であつた日本電力株式會社を過般退社された

頓戸 勇氏(大一三法) 今般神戸市下山手通二丁目角に三角貿易商會を創設し専ら輸出絹布、綿布、雜貨の貿易に當られることになつた

重川 肇(昭二專法) 東京市下谷區池端七番町三八今江方

高田瑞穂(天一五專法) 高知市潮江上町前川二一〇二ノ一

校友住所移動

茅田忠兄(天一五專法) 明石市櫻町二丁目一〇三

樹本巳之助(昭二專商) 七岩井實治郎方

阪口軍司(天一三專法) 東京市外大森入新井新井宿長田三四堀方

光行龍生(天一五專法) 西成區粉濱町官有地第七號

有本壯吉(天一四專商) 青島臺東鎮露化路光陽硫化燐工廠

和田恒雄(昭二大經) 神戸市中道通九ノ九六

今井 清(昭二專法) 南區心齋橋北詰

井上常幸(昭二專商) 兵庫縣川邊郡小田村今福仙田元宣方

金森彰(天一三商) 西成區長已通二丁目一四合同紡織社宅第一二號

樹岡政治(天一五專經) 天津日本租界壽街七號天津炭業公司

谷田諸十郎(明三九法) 港區市岡町八九二

前田清一(天一專經) 大邱府三笠町二一帯地此花區上福島北四丁目二七

米良貫一(昭二專法) 東成區生野國分町一〇九

沖原 力(天一三商) 阪神沿線今津町春杭

上島信敏(明三九法) 名古屋市西區菊井町五丁目

窪田忠一(昭二專經) 港區西田中町二六古川方

新田武夫(天一三經) 中河内郡布施村東足代六五五

藤井清秀(推) 西區京町堀上通四一九

西野甚藏(昭二專經) 港區八幡屋元町二ノ八五

大島守吉(昭二專法) 東淀川區國次町三〇七

片岡武彦(天一五專經) 福岡縣粕屋郡宇美町大谷

朽木秀三郎(昭二專商) 炭坑株式會社

岡田英臣(昭二專法) 和歌山市鷺ノ森南ノ丁一

式會社大阪營業所

南 肇(天一五專法) 西淀川區大仁町一七六殿村敬美方

福田繁芳(昭二學法) 東京市牛込區市ヶ谷河田町新一

林 芳 雄(天一四專法) 兵庫縣明石市太寺

秋山米 藤(天一三法) 北區堂島濱通二丁目大阪商業會議所

水島有年(天一五大商) 兵庫縣川邊郡園田村森宇南口三二三

中村泰 音(天一五大法) 豐能郡麻田村蟹ヶ池

遠藤常 雄(天一二商) 吹田町宇野二七二ノ七

田中 續(天一七法) 堺市大濱北町一

千田芳一(天一三法) 北區南森町二九西村商店

校友改姓名

(舊) (新)

大・四・專・商 脇屋 浩 黒田 浩

昭二大經 木下 恒雄 和田 恒雄

大一二商 山村 常雄 遠藤 常雄

校友逝去

昭和二年六月十五日 神戸市西代山下町四丁目一六

松原武郎氏 (大正九年西區學科出身)

右訃音に接し謹んで弔意を表す

五月 雨

關西大學講師 今山 實

何となく心の傷むこの梅雨よはやく上れと思ひ詫ぶかな
酒はよし心の傷む時によし腹の立つ日はいやによし

學生彙報

山岳部報

久しく沈黙に過ぎた山岳部は本學年に入り新新氣鋭の新會員を多數得茲に再生の期が熟し數回の旅行、數回の講演會を催した。詳細は下記の如くであるが尙ほ夏季休暇中の計畫も既に成立した數案に基き數班に分つて活動の豫定である。尙今回部報を發行し部員章を新定し次で部歌を募集しペナントを新調する筈である。

第八回登山 五月二十二日午前六時大阪發攝津の綠野保津川の絶景を後にして八時過龜岡に着、直ちに保津橋を渡りいよいよ山城丹波の國境に向つた檜の木、葉蔭、谷間のせせらぎ、水車の音、鶯の聲等が先づ我等を迎へた。

學歌の合唱は歩度を愈りズミカルに早め十時過には神明峠下の二池の傍に着いた。大小の二池には碧水を満満と湛え牛待神明等の山山が其英姿を浮べて居る、折柄の雨は一層の靜寂を深めて塵寰を去つて一百里の思あらしめた。休息の時間も過ぎた。残り惜しい袂を拂ひ雨を冒して愈峠にさしかかつた。有難くも中腹で雨は止み頓て顯れた太陽の光、微風さは雨に汗に濡れたシャツを綺麗に乾すと同時に心まで爽かにしてくれた。間も無く我等は城丹國境神明峠の頂(標高八二五米)に立つた。連延して果も無き山の波、將足下に飛ぶ雲の去來。其山の隙から白雲が跳舞し、其雲の切れ目から若葉の山が顔を出す、此の壯大なる風景は登山家で無くては得られないものであらう。彷彿雲を押し分けて進んで行くやがて附近一面の熊笹帯となつた、愛宕山頂も程近い嬉びながら山背をグルミ半周する其愛宕神社石段下に出た、苔の生えた燈籠に御殿櫻のハラハラと散る下で一同神殿に額いた。(標高九二四米)時に十一時十五分、晝食に舌鼓をうち充分の休息をし十二時半茲を出發した。急坂を下つて鎌倉山月輪寺に圓光大師の遺跡を訪れ再び飛ぶが如く急勾配を下り清瀧川の岸に出で二時半には既に試峠を學生歌と共に降つて居た。陀野念佛寺、祇王寺、祇女佛御前墓、義貞首塚、去來墓、落柿舎、野の宮、思ひ出多い嵯峨野を通り初夏の夕を樂しんだが去らば午後四時四十三分嵯峨發の汽車に乗り同六時二十分大阪に着き横巻大佐を見送つて解散した。本日の行程五里半。

參加者 河村講師、菅桂、北川一期、池永利、一、日下吾一 (日下報)

第九回登山 花の紅散り果てて世は若葉青葉の頃である。さす黒い煤煙の都を離れた上り列車で富田驛に着いたのは恰度午後一時、今日は正に二十二年前を回顧せしめて皇國の興廢此の一戦にありを想起する海軍記念日である。天氣は當時の如き快晴である。本日は土曜日であるので半日登山のプランの下に旅行を決定した。集るもの二十餘人、路を直ちに西北にさる、青空一碧一片の雲も無い晩春の空には全身是れ聲なりと言はぬばかりの雲雀の朗嘯、見渡す限りの麥秋の田面には今を限りの生命なりと云ひたさうな黄金色の波がざわざわと打ち寄せて居る。此處彼處時折り舞ひ上る蝶の姿を右に左に川村先生を先頭に田

畦道の綠草の上をバツサミ足音たてて進む。春日神社の邊から次第に爪先上りになつて奈佐原の村落を過ぎる目指す秀峯がニューミ横顔を出して呉れる。杜鵑花紅に燃ゆる巖頭蜀魂の歌を響かせる溪間、全く人里を離れた自然境に流汗を涼風に馴らして行く氣持は亦格別である。午後二時三十五分多武山上(標高二八一・二米)に着き一同は三角點石柱を取り巻いて歡呼の聲を上げた。近き將來には此處に京大の地震觀測所が出来る筈である。此の山上から生れる高遠なる理論、重要な法則、精密なる實測は此の孤峯をして更に其涼風眺望以上に有名ならしめるであらう。南の方下ス黒い大大阪市を呪ひながらも遂に下山の止むなきを悟り安威村に至り鎌足古廟に詣で繼體陵を拜し、再び塵居に歸つた。たゞひ數時間とは云へ人寰の外、綠草の山に在つた事を思へば獨り車中に會心の笑を洩さざるを得なかつた。本日行程二里半。

參加者 河村講師、藤田、星野、日下、菅、池永、大畑、森田、西尾、平井、平池、廣田、細井 (平井報)

第十回登山 六月六日、文藝大會翌日の休日を利用して神戸背山へ行つた。午前八時神戸阪急終點に集合大立目先生の先達で先づ布引に向つた。雌瀧道の手前から左へ妙見山道に入る。初夏の日は頭上から遠慮無く照らすし坂は思ひきり急である。汗まみれに成りエイエイ聲して上つて行く。汗の量と比例して神戸の町、兵庫の海が一步一步足下に展開してゆくの嬉しい。涼しい風の吹く木影に休んで息をつき、更に上る。途に田中少佐は専門學の立場から實際の地形に付て耳新らしい御

話があり、大立目先生は七年在住の古蹟に就て面白い物語があつた。二本松から狸狸池、それから藤の茶屋、おれの庭は廣からう、東屋で一休みしよう、藤棚の下に床几に腰をかけて先生のコーヒ接待を受けた。次に再度山大龍寺に詣で裏へ廻つて再度山頂へ登つた(標高四六八米)西に下り鹽ヶ原、大師行場、牡丹餅坂なから炭酸泉路へ出て炭酸泉を飲み、新緑の山の中、若草の路の上、試に名づける七景八勝に一同興じながら遂に十二時半市ヶ原へ着いた。茲に原田先生の別荘がある先生は不在であつたが御心盡しの神戸牛は大皿に山盛りになつて一同の前に出された。忽ち鍋に入れられ御厚意難有く頂戴し若人は輪投げに勝負を爭ひ老人は晝寝の夢に河鹿を聞いた。二時に成つた、いつ迄もゐたいが、さまではさ名残を宿に残して御暇し水源地を通つて布引山下へ出て布引温泉に一浴して散會した、時に午後六時。本日行程三里餘。

參加者 大立目、河村兩講師、田中、板津兩軍事教官、藤田、加藤、日下、菅、森田、池永、廣田、平池、西尾、岡田、白川

第十一回登山 六月十二日皇陵崇敬會と合併旅行を催した。午前七時五十三分天王寺乗車、八時半王寺下車。達磨寺、放光寺趾を経て孝靈武烈顯宗三帝陵を拜し、次で二上山上大法皇皇子墓に詣で雌雄に登り三等三箇點(標高四七四・二米)のほりから金剛葛城の全景を見岩屋峠洞窟に休憩し一路當麻寺へ向つた。奥院の参拜も済してから連歩下田へ出て車中の人となつた。尙詳細の記述は崇敬會報に譲つて茲には省略する。

講演會 本學年に入つて四回の講演會を

催した。即ち六月七日、同十六日、同二十一日及び二十八日に互つて田中少佐の飯盒炊事其他登山に關する諸般の研究の御講演があつて、其後各自共同炊事實習を行つた。副食物につきては自然物利用の計畫を立て種々の藥草其他に就きて特種の調理法を研究し試食をした。始終大立目部長新發明の新食物を供せられた。尙本講演會は來學期に於ても之を開催し田中少佐の實地の御研究御經驗に基く登山學、地圖學、等の蘊奥を披瀝せらるる豫定であるから有志諸君は此の機會を失せられざるやう希望する。

第十九回皇陵崇敬會例會

五月二十九日に一行は午前八時京阪天滿橋を發し一時間餘で伏見桃山に下車、光明院、崇光院兩帝大光明寺陵に參拜し次で伏見松林院陵に參拜した。後彼の土佐の藩士阪本龍馬が幕府の忌諱に觸れた際に助けられ辛ふじて遁れることを得たと言ふことに關して建てられた恩賜記念碑を旅館寺田屋に見る。同家では龍馬の遺墨、遺愛の刀鐔を秘藏してゐる。辭して鳥羽院、城南離宮の遺址城南宮に至り、休憩し、中食後、白河院天皇成菩提院陵、鳥羽院天皇安樂壽院陵及び近衛院天皇安樂壽院南陵に參拜、又眞幡寸神社、北向不動に參りそれより仁明帝深草陵、深草十二帝陵に拜し寶塔寺、石峰寺、藤森神社、稻荷神社に詣で豫定の行動を終へ京阪稻荷より歸阪の途に就いた。尙、當日の參加者は、河村講師、淺見敏郎、入江賢壽、齋藤湊、平井美水、西茂通、築留寛、稻垣三郎、河村信典、奥川武郎、平井の諸君であつた。

第二十回皇陵崇敬會例會

六月十二日、關西線天王寺驛集合山岳部を併せて一行十四名は大和の王寺、下田方面を訪ふ。王子に下車して途中達磨寺、當麻寺に參詣し又、第七代孝靈天皇片丘馬坂陵に參り、それより第二十五代武烈天皇傍丘般坏丘北陵並びに第二十三代顯宗天皇傍丘般坏丘南陵に參拜した。午後は山岳部に參加して二上(二子)登山を爲した。登山シーズンの近づく頃先

田日出夫、木村仁吉、奥川武郎、平井、堀、白川の諸君。

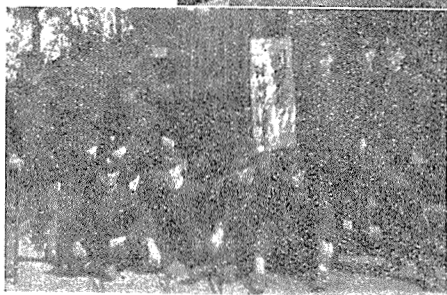
福島法二旅行俱樂部

第一回旅行記

本學專門部法律學科第二學年同好の人人相寄り福島法二旅行俱樂部を組織し五月二十九日第一回旅行して四條噺奈良法隆寺方面に赴いた。當日午前七時三十分片町驛に一同集合七時四十八分出發、新緑に風薫る攝河泉の平



孝靈帝陵前於け
皇陵崇敬會會員行



福島法二旅行俱樂部員

づ先鞭として恵まれた絶好の登山日和に意氣發洩たる一行は雄岳、雌岳を踏破して頂上を極め、遙かに金剛葛城を眺めて眺望限りなき快味を獲て下山、一里餘の道を歩んで下田驛より歸阪の途に就いた。尙紙上を借りて當日御世話賜はつた陵墓守長殿に深く謝意を表する次第である。當日參加者は左の通であつた。高橋中佐、田中少佐、板津大尉、河村講師、入江賢壽、淺見敏郎、齋藤湊、平井美水、藤

原を回顧しつつ四條噺に到り、直ちに楠正行の墓に詣でた。次いで四條噺神社に參詣し記念の撮影を終つた。それより更に車中の人となり、木津にて乗換、奈良にて下車、一時晝食の爲開散した。或は三笠山麓にて鹿を友に

して食するあり、淺茅生に身を横へて携帯の辨當を開くあり、各自思ひ思ひに晝食を終へた。暫て一同再び集合し大和の法隆寺に向つた。日本最古の堂塔伽藍に遙かなる往昔を偲び、仁王門前にて記念撮影をなし、徒歩龍田に到り、更に王寺に向つた。王寺より歸途につき午後五時天王寺驛着、青木太郎君の發聲によつて一同萬歳を三唱して、楽しい一日の行樂を終へた。忙中に閑を求めて自然の風光に接し清澄なる大氣を思ふ存分に呼吸し、麗らかな陽光を浴びる身體が爽颯たるを覺へる。黄塵の中に住む身にこつては生きた學問や潑刺した生氣や、耐久力等は皆旅行に依つて與へらるるさうであり、又これ等旅行に依つて學生生活を深く印象づけられたことを思つた。

因に當日參會者は左の諸君であつた。
青木、喜田、阪井、長行、前田、井村、森、仁科、橘、誅山、鹽崎、岸本、丸山。

(K・M君報)

福島辯論部報

第二回學内雄辯大會——五月二十二日午後六時より市内難波元町二丁目鐵眼寺に於て開催各辯士はそれぞれ得意の辯を振ひ、滿堂の聴衆を感動せしめた。午後十時半盛會裡に閉會當日の出演並に演題を左に掲げる。

開會の辭
安住なし得ぬ苦悶の社會
經濟學より
生活方針の地方的區分
關爭より解放へ
時局問題の側面觀
混亂に直面して
委員長 神戶 鶴三
經濟科 阿部 武夫
法科 田中 治郎
經濟科 溝畑 浩三
商科 川崎 敬治
法科 溝 義光
法科 長谷 正事

私生兒問題を論ず
自然は泣く北露の空
揆 抄

法 科 春木太郎
商 科 白髮 茂
部 長 田中久雄



中畿中學相模大に會せし歌山師範學校選手

普選實施に直面して
傳統的哲學を抛つて
昭和の新日本を建設せよ
有爲轉變の世界より
團體の精華を論ず
世の中を何のへちまと思へども

法 科 白井正實
文 科 中道正夫
法 科 小宮官之助
經濟科 西内亘司
商 科 渡邊正人

不過に泣く女性の群の爲に
閉會の辭

法 科 山田 實
副部長 神戶 鶴三
副部長 渡邊 正人

徳島遊説——六月十五日午後六時より徳島城
千秋閣に於て本學福島辯論部主催、徳島毎日
新聞社後援の下に第一回地方大演説會を開催

した。四日間に亙る後援新聞社の記事、本學
校友、木下眉城、中田豊雄兩氏の多大なる御
援助により聴衆は堂に溢れ極めて盛會であつ
た。當日のプログラムは左の通りであつた。

開會の辭 委員 新井初美
大瀧眉山に晩鐘は聞ゆ 經濟科 大熊 隆
再び當市に叫ばんとして 法 科 灘 龜藏
鳴門の空に一陣の風 商 科 渡邊 正人
文相三土忠造氏に一言を呈す

故國を出でて十餘年
法 科 楠屋勘助
法 科 新井初美
部 長 田中久雄

經濟界を中心とせる近世
商 科 神戶 鶴三
社會運動の趨勢
民衆運動の十字街道に立ちて

學生雄辯界を去るに當りて經濟科 松井 廣
閉會の辭 委員 川上孝則
尚此の機會に部員一同は當日の後援者一同に
深く感謝の意を表する次第である。

千里山ア式蹴球部報

第八回極東競技大會京阪地方ア式蹴球豫選の
第一日は去月四日日本學千里山球場に於て開か
れた。本學蹴球部對大阪高工俱樂部戦でレエ
フェリーは神田氏。

午後四時開戦、終始本學は敵を壓迫し、遂に
前半一點後半四點を得て本學先ず劈頭の凱歌
を奏した。

千里山陸上競技部報

本學對法政大學對抗陸上競技大會 大阪朝日並に
東京朝日新聞社後援の第四回本學對法政對抗
陸上競技大會は六月五日午前十一時より明治
神宮トラックにて強雨を衝いて舉行された。

本學選手は第一回戦以來連勝の餘威、天を衝
く意氣を以て臨み、敵も亦、連年の屈辱
を雪がむものとの意氣凌まじく全力を盡して
闘つた雨の爲コンディションが極めて悪く、
期待された好記録も出なかつたが、泥田の如
き競技場の中で兩軍選手必死に戦ひ、大接戦
を演じたが結局、三十七點半對二十五點半で
本學四度優勝し朝日新聞社寄贈のトロフィー
を獲得した。

法政はフィールドで七點勝越したけれども、
千五百、五千、四百に零敗したのが主たる敗
因をなして居るに見られてゐる。當日の成績
は左の通りであつた。

百米 1(二秒八)菊地(法)、2 福田(關)、3 朴
(法)

走飛 1(六米二五)井本(關)、2 天野(關)、3
有田(法)

千五百米 1(四分五七秒六)津田(關)、2 片淵
(關)、3 岸(關)

圓盤投 1(三三米)古川(關)、2 中澤(關)、3 福
島(法)

ロハドール 1(二六秒九)小林(關)、2 及川(法)
3 笹盛(法)

五千米 1(一七分三四秒)津田(關)、2 片淵(關)
3 中川(關)

槍投 1(四三米一八)谷口(法)、2 中野(法)、3
綿引(法)

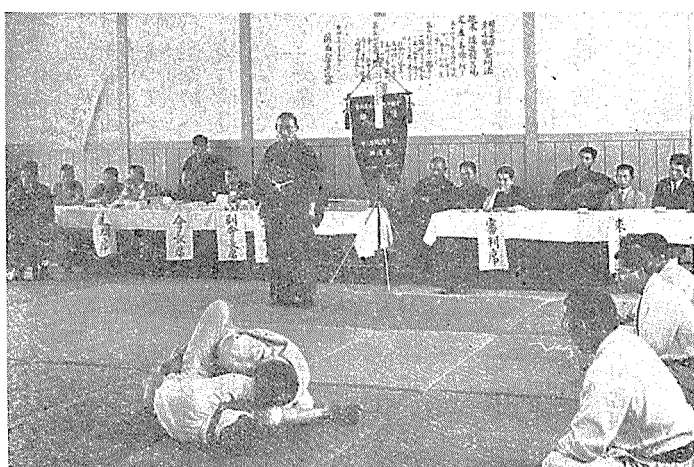
四百米 1(五四秒四)岸(關)、2 矢柴(關)、3 松
葉(關)

走高飛 1(一米六四)菊地(法)、2 天野(法)、3
吉川(關)、3 井本(關)

棒高飛 1(三米一九・五)寺田(法)、2 平野(關)
3 西田(關)

八百米リレー 1(一分三六秒六)關大(小林、松
葉、福田、岸)

OSAU第三回優勝陸上競技大會 入梅の日、皮
肉にも炎天盛夏を思はせた六月十二日綠濃く
太陽に映えた京阪寝屋川競技場に於て大阪ス
チューデント、アスレチック、ユニオンの優
勝陸上競技大會が舉行された。少し暑かつた
が先づ絶好の運動日和で然もコンディション
極めて良く本學陸上部は十七種目の競技中、
總得點八十點半を以て他校を凌いで悠悠々優
勝の榮冠を獲得した。中にも當日の五千米決
勝に於ける本學中川君、日大専門の下村君
との接戦、百米及び二百米に於ける井本君の



全中國中學學校柔道大會

活躍、最後の千六百米リレー決勝に於ける丸
谷君の頑張り、二走者石渡君の健闘、三走者
矢柴君の慧星の如き快走振り、彼の強敵を四

十米も抜き切つたのは誰の眼にも美事であつた。最後の松葉君の洗練された走法は敵の追従を許さず、恰も獨走の觀があつた。因に當日の成績は左の通りであつた。

トラック豫選

▲百米豫選入者

井本誓順(豫一)平野季雄(專一)

▲二百米豫選入者

井本誓順(豫一)平野季雄(專一)

▲千五百米豫選入者

矢柴春雄(豫三)中川英一郎(豫二)田村

(一) 勝

▲百米決勝

二着井本誓順(豫一)

▲二百米決勝

二着井本誓順(豫一)

四着平野季雄(專一)

▲四百米決勝

一着矢柴春雄(豫三)五十四秒四

▲八百米決勝

一着矢柴春雄(豫三)二分十四秒二

三着石渡健吉(豫一)

▲千五百米決勝

一着矢柴春雄(豫三)四分三十八秒

三着中川英一郎(豫二)

▲五千米決勝

二着中川英一郎(豫二)

三着田村 (專一)

▲八百米リレー決勝

一着本學チーム(丸谷、井本、矢柴、福田)一分三十六秒四

▲千六百米リレー決勝

一着本學チーム(丸谷、石渡、矢柴、松葉)三分四十五秒八

▲低障礙決勝

四着戸川靜馬(豫三)

フールド決勝

▲走幅跳決勝

二着花谷猛(法一)六米二六

四着平野季雄(專一)六米〇五



▲走高跳決勝

一着吉川平治(豫二)一米六九

二着中澤四郎(法一)一米六五

四着井本誓順(豫一)一米五八

▲鐵彈投射決勝

二着中澤四郎(法一)十米八二

三着吉川親(法一)十米五九

▲圓盤拋決勝

一着古川親(法一)三十五米九八

三着有賀次郎(豫三)三十米〇五

▲槍投決勝

二着南浦宗太(法二)四十一米一八

四着戸川靜馬(豫三)四十米一〇

▲棒高跳決勝

一着平野季雄(專一)三米一〇

二着西田利廣(法一)三米

▲ホップ、ステップ、エンド、ジャンプ決勝

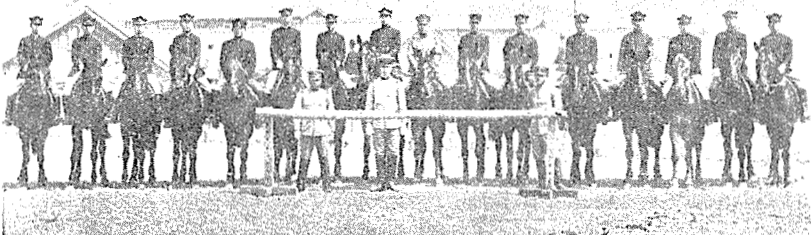
三等門脇治郎(經一)十二米一〇(依門脇君報)

關西大學俳句會例會

關西大學俳句會は六月十三日(月曜)午後三時から本館經濟科第六教室で例會開催、兼題、

蛙、五月雨の批判をし合つてから即題、夏服、バナナを課し靜かな句三昧に時の移るを忘れ、薄暮に及んで退散、會者十四人

東西對抗馬術競技に於ける本學選手のパンケツト飛越



員部部術馬島福

近畿中等學校相撲大會

本學相撲部主催

近畿中等學校相撲大會は六月十九日正午より千里山花壇に於て舉行された。今回は相撲部委員小角君の斡旋により新大阪鐵道と締契しその援助も極めて大であつた。且つ從來遠隔の地で舉行されてゐたものを學校附近の花壇で舉行することになつたのは本學相撲部並に本大會將來の爲め誠に慶賀すべきことであらう。参加校は全て中等部三十二校専門大學部十二校に及び近畿所在の諸校を殆んど網羅して餘さず、大毎主催の大會を除いては流石に最大の學生相撲大會であるうなづかれた。觀衆は開會前既に三千餘名を越え、極めて盛會であつた。當日個人優勝の榮冠は、

和歌山師範の宮川守三君に、二等は御影師範丸山順次君、三等は大坂貿易語學校田所稻實君によりそれぞれ獲得された。團體戰に於ては猛烈なる爭鬪戰の結果和歌山師範の優勝するところとなつた。當日は番外として専門大學紳士相撲行はれ、校友馬場君優勝し、二等上村君、三等山口君の占むるところとなつた。尙東方、吉田(醫大)秋山(同大)小山(齒醫)、楠井(清風會)中村(清風會)、西方、岩佐、山口、村上、馬場、竹田(各本學側)に分れ正五人拔が行はれたが、遂に預りとなつた。

第四回全國中等學校柔道大會

柔道大會

六月十九日午前九時より千里山道場に於て、本學柔道部主催第四回全國中等學校柔道優勝大會を舉行、出場校二十八校に及び、極めて盛會であつた。昨年優勝した御影師範本年も再び優勝した。甲陽中學(二等)姫路師範、關西學院中學部(三等)であつた。

千里山馬術部報

横卷前軍事教官並びに顧問賀久講師の御紹介に依つて今山講師を新部長に推戴した千里山馬術部は或は關東に或は九州に連戰連勝したいに本學の名聲を轟かした。本學期間の主なる行事は左の通りであつた。

四月九日、十日

習志野騎兵學校乘馬大會に出場

撒紙競馬(五十七名中)三等、豫科、大谷眞藏、團隊選手障害飛越競技(四十二名中)二等、豫科、大谷眞藏、三等、本科、樋口健造
四月十九日、同二十四日

九州福岡練兵場に於ける第四回全國乘馬大會に本部よりは織田マネジャー引率の下に岡島、樋口、大谷の三君を送つた。萬餘の觀衆に圍繞され全國より馳せ参じた乘馬俱樂部、大學專門學校馬術部の駿足百五十餘の間に交り、畏くも賀陽官殿下御前に於て九州の雄、九州帝大、熊本醫專、關東の白眉、早稻田大學、法政大學等を一蹴し美事優勝し、我が關西大學馬術部の名を轟かし會長松平伯爵より大毎賞、及福岡縣知事カッブ、金牌等を授與された。尙個人競技に於ては障碍飛越一等、岡島文雄、同三等、樋口健造、駢步卷乗競技三等、織田正一、それぞれ入賞した。

五月二十二日
大阪愛馬會へ三好騎兵監來會あり、當本學教官高橋中佐、田中少佐、板津大尉三氏も來會せられ、部員、織田、岡島、春元、樋口、大谷諸君の馬場馬術を行ひ、三好中將の賞讃を得た。

六月十九日
關西學生乘馬聯盟主催大毎、第四師團後援の第四回東西學生對抗馬術競技並に第一回聯盟内對抗馬術競技が騎兵第四聯隊營庭に於て行はれた。當日出場の關西選手十名中本部よりは岡島、織田、樋口、大谷、中澤の五名を出し、何れも先峰、中堅、大將となり、關西側選手を督勵し以て關東軍を一蹴した。尙聯盟内對抗競技に於ては本學本

科(岡島、樋口、織田)優勝し、大毎寄贈の優勝旗を獲得した。本學豫科(大谷、中澤岡本)は三等であつた。因に當日個人賞獲得者は左の通りであつた。

高障碍一等、樋口健造、同二等、大谷眞藏馬場馬術二等、岡島文雄、透導障碍、三等織田正一、當日は今山部長、賀來顧問、田中、板津兩教官も出席あり選手を督勵さるるこゝ大なるものがあつた。

六月二十一日
大阪愛馬會遠來會を催はし、愛馬會事務理事近藤氏、教官、三ヶ尻氏引率の下に本學より織田、岡島、樋口、大谷、中澤、岡本参加し正午千里山學舎を訪門、食堂にて、今山部長、高橋、田中、板津各顧問と會食の上、板津教官の乘馬の案内で射撃場敷地、馬場敷地等見學の上、三國十三を通過し堺筋より本町を経て愛馬會に歸つた。

本部今學期の成績は右の通りであつた。猶七月十五日より八月十五日まで馬術部員一同は第一、第二の二班に別れ、信太山及愛馬會にそれぞれ合宿し夏期休暇中を勉學の傍ら馬術研究に精進する豫定である。

福島學舎馬術部部報

福島學舎馬術部の第一學期間の行事は左の通りであつた。

第一回部員總會 五月十八日福島學舎第十一教室に於て第一回部員總會を開催した。當日左の通り役員を選舉した。



全國大學專門學校學生聯誼會紀念攝影

福島學舎馬術部長、奥辰雄、同副部長、松井重一、同委員、喜田勝馬、筒井一馬、白井正實、御園生孫一、伊藤光一。

同月二十二日委員會を開催した。同委員會に於ては左記の通り決定するところがあつた。

一、馬術部部員章選定
一、本年度第一回練習に關する協議
一、馬術部部則の作成

關西大學福島學舎馬術部部則
第一條 本部ハ關西大學馬術部ト稱ス。

第二條 本部ハ關西大學專門部内ニ本部ヲ置ク。

第三條 本部ハ關西大學學生ヲ以テ組織シ部員制トス。

第四條 本部ハ部員ノ親睦ヲ計リ精神身體ノ修養ヲ修メ馬術ノ普及ヲ以テ其目的トス。

第五條 本部ハ第四條ノ目的ヲ達成センガため關西學生乘馬聯盟則ニ從ヒ一定場所ニテ部員ニ馬術ヲ教授セシメ部員中ヨリ選手ヲ定ム。

第六條 本部ハ左ノ役員ヲ置ク

部長 壹名

副部長 壹名

聯盟委員 參名

委員 若干名

會計委員 壹名

第七條 部長ハ最上級生ニテ本部ニ功勞アルモノヲ推ス。副部長各委員ハ委員會ノ決議ニヨリ部長之ヲ任命ス。

第八條 副部長及各委員ノ任免ハ部務法ニ因ル。

第九條 役員ノ職務左ノ如シ

部長ハ本部ヲ統帥ス。

副部長ハ部長ヲ補佐シ部長差支アル時ハ之ニ代ル。聯盟委員ハ聯盟事務ヲ處理ス。

委員ハ部長ヲ補助シ部員ト協力シテ事業ノ遂行ヲ圖ル。會計委員ハ本部ノ會計事務ヲ掌ル。

第十條 委員會及部員總會ハ部長之ヲ召集ス。

第十一條 本部ニ關シ本則適用ナキ時ハ部務法ニ因ル。

第十二條 本則ノ變更改廢ハ委員會ノ決議ニヨリ決議ハ委員ノ過半數ノ同意ヲ要ス。

附 則

本部則ハ昭和二年五月ヨリ之ヲ施行ス。

第一回練習期

五月二十二日より六月二十六日に至る期間。

A班——信太山野砲隊練習生。

奥辰雄、松井重一、筒井一馬、喜田勝馬、御園生孫一、白井正實、岡田武數、稻美信吉、岸田久馬、早川信男、三谷豊、井村虎夫、花田實、釣仁八、眞鍋謙一、藤井藤三、今西浩、村井政章

B班——輻重隊練習生

奥辰雄、白井正實、井村虎夫、小田倉重

右練習期中、六月十二日に濱寺公園に遠乗を

なす。指揮者副校長以下下士三名兵卒三名
當日練習記念撮影をなす。

東西對抗學生馬術競技大會 大阪毎日新聞社並に第四師團後援關西學生乘馬聯盟主催關東學生乘馬協會對關西學生乘馬聯盟對抗技は關西聯盟内の對抗技に共に六月十九日午前十時から大阪騎兵第四聯隊馬場で舉行された。

幹事長大阪醫大上田氏の開會の辭、會長大林義雄氏顧問高波騎兵第四聯隊長の挨拶の後競技を開始駢歩卷乘技に續いて聯盟内對抗技を行ひ、馬場馬術から障礙飛越に各校選手の妙技を盡したが、大毎寄贈の優勝旗は本學學部の手に歸した。

かくて東西對抗技に移り昨年の優勝關東側から名譽會長第四師團附關谷少將へ優勝旗を返還して開始し、競技の歩度は駢歩を以て行ひ三段横木、土壇、煉瓦、筵、竹柵、壕ミ柵バンケット、阪路難路の通過、阪路の障害等を越え途中停止、右後脚旋回、左右駢歩の發進、卷乘等の馬術を行つたが兩軍とも兩地方を代表する選手として騎坐堅固に扶助の限りを盡したが探點の結果千三百十二點對千二百九十點で關西方優勝した。當日本學馬術部選手の成績左の通りであつた。

聯盟對抗技 優勝(三二六點)關西大大學部三等、關西大學豫科。

駢歩卷乘賞 本學專門部—白井正實
駢歩卷乘賞 本學專門部—御園生孫一
駢歩卷乘賞 本學豫科—上田辰造

全國大學專門學校學生雄辯大會

六月二十四日中央公會堂に於て本學辯論部主催全國大學專門學校學生雄辯大會が開催され

た。本學辯論部の年中行事として最も有名な大會のこゝ故全國各大學專門學校よりの参加辯士多く、聴衆も堂々として、晝夜共極めて盛會であつた。因に當日のプログラムは左記の通りであつた。

晝の部

開會の辭

小山 君

我國小作農を考究して爭議に及ぶ

本 學

中村徳三君

勞資慘憺挽回の一策

同

失 題

大阪高商 三木平太郎君

盟より盟への人生

西山專門 猪澤悦三君

現代宗教教育運動に一鞭す

大正大學 榮久庵鐵念君

時の流れは吾人を如何なる地位に置いたか

同志社高商 吳 哉 龜君

健康保險の社會的意義

日本齒專 中島恭治君

法律の規範性と感情性

本 學 矢澤俱好君

社會維新の聲の下に

拓殖大學 菊地主計君

社會的共存共榮の第一歩

廣島高商 小川惠正君

ギロチンの進化

專修大學 前川 勇君

揆 擧

司會者(本學) 白川惠宣君

工人として見たる經濟界横濱高工

佐々木武雄君

内外諸政に一大手術を求めつつある祖國

本 學 山田 實君

絶 叫

廣島高工 長崎 章君

さまよひ歩く金字塔巡禮の群

日本大學 本間 章君

社會組織の推移と經濟政策の進化

神戶高商 笹嗟實夫君

時代をあやつり行く青年の思潮

法政大學 菅 順之助君

社會問題の道德的基礎づけ

大谷大學 星谷 慶君

學窓を去るに臨みて

本 學 樫本信夫君

閉會の辭

同 渡邊正人君

夜の部

開會の辭

本 學 西代 幹君

不遇に泣く敢て女性性の群の爲に

同 神戶鶴三君

人間が商品か

同 進 正男君

失 題

大阪藥專 淺野嘉人君

自覺なき解放

立教大學 丸山忠富君

國家思想と社會思想に就て

日本專門部 藤井正雄君

現代文明の史的原因と其目的

彦根高商 中山 勇君

國民生活と煙の我等

大阪高工 棚橋各平君

立場を極めてから

東洋農大 南 秋藏君

所 感

本 學 清水政秀君

叛逆禮讃の豫曲

廣島高師 渡邊勝也君

革命前後に於けるロシア正教

龍谷大學 宇野道慈君

無智と安俟の一社會相

大阪齒專 清水孝之助君

社會から社會へ

立正大學 石川存靜君

揆 擧

司會者(本學) 田中久雄君

眞に地平線上に生きる爲に

本 學 北市増隆君

失 題

京都帝大 平 利人君

斷頭臺上に立つ學生辯論界を見つめて

本 學 松井 廣君

普選を境として新國民

明治大學 長尾新九郎君

政治哲學の提唱

關西學院 藤田四六治君

原料と戦争の因果關係

番犬出でずんば之蒼生を如何にせんや

東洋大學 渡邊幾次郎君

暴露戰術の試み

早稲田大學 稻岡 進君

自由主義の本質と其限界中央大學

大森經夫君

失 題

本 學 蘆下益治君

閉會の辭

同 萩原精二君

音樂部演奏會

關西大學プレクトラム・ソサイエティーでは去る六月二十六日午後七時から市内實業會館講堂に於てマンドリン、オーケストラ演奏會を催したが聴衆多數頗る盛會であつた。當日の曲目を左に掲げる。

第一部

一圓舞曲 フローレンスの夜 マチヨッキ作

二モツアルト作 第一幻想曲 マチヨッキ編

三西班牙風による狂想曲 サルベッティ作

四組曲 イベリア半島の描寫 マチヨッキ作

一部 マドリッドの夕(西班牙用圓舞曲)

二部 美しきカステリヤの女(西班牙風小夜曲)

三部 セヴィラの空人(西班牙風狂想曲)

第二部

五序曲 魅惑の島 コ ク 作

六四重奏 (一) 小交響樂 ローマの思出 フランシア作

(二) 海邊の唄 キルバルディ作

七五重奏 (一) ローマンス 懺み アマダイ作

(二) 朝 アマダイ作 三番

八大幻想曲 ムーア人のグラナダ ガルシア作

A 前奏曲

B ボードビル王のグラナダの別れ

C アラビアの小夜

D 樂舞曲と終曲

九田園幻想曲 村の祭典 ジュリアン作

A 前奏曲

B 村人の合唱

C 愛の田園詩

D フアランドール

生花研究會報

過般千里山學舎内に於て同好の學生相寄り、關西大學生花研究會なるものが創設された。勉學の餘暇趣味深き生花の研究に従ひ自ら品性の高揚に努めんとするもので、指導者とし

て、目下大阪毎日新聞社生花研究會及緒方病院生花研究會の指導をなしつつある商學部二年在學中の中津温尚齋君が専らその任に當つてゐる。研究日は毎土曜日で午後零時半より千里山本館に於て研究することに於てゐる。因に同好の學生諸氏並に初心者諸氏の入會を特に歡迎してゐる由である。但會費一ヶ月壹圓八拾錢を花代として徴收する由である。

千里山端艇部報

五月八日―大高、高工、日大、關大等よりなる大阪學生漕艇聯盟第一回大會が舉行された。我大學豫科チームは第一回に高工と對し不利なる第二コースを取り意外なる接戦を續け半艇身の差を以て之を破る。優勝戦は日大を倒した大高に當り又も第二コースとなり、やや不利の立場にあつたがスタートよく都島橋前にて約半艇身を抜いたがファールとなり、再びレースを行つた次には大いにスタート悪く、我軍の力漕も效なく遂に一艇身半の差で破れた。

メンバー 田 藤口吉羽中
米 森佐山直丹田
C S 5 4 3 2 B

五月十五日―關西漕艇俱樂部の大會に出場第一回に同志社を破り第二回戦に彦根高商と組み猛烈なる接戦の後僅か一尺の差にて敗れた。彦根は當日優勝した

メンバー 米 田中藤口吉村羽
C S 5 4 3 2 B 丹

同日スカールにて我が選手耕山君孤軍奮闘し

たが優勝戦で敗れた。

五月二十九日―敏馬濱にて神戸高商大會に出場敏馬俱樂部と對戦四艇身の差にて大勝したメンバー同前。

六月四日―神鐵西管俱樂部大會に出場膳所中學と對戦し五艇身の差を以て大勝した。メン

端艇部歌

Composed Rannsky. N.

マハセン リーノオド リガオカ ニ ワレラ カ
ンダイ ヲツ クーゴコ ー カリ ー オ ー ヨド
ナガレハ キヨウ フ ワレラ グクリウ ソノナカニ

1927.6

端艇部歌成る

さきに學生一般から募集した端艇部歌十餘篇の中から雑誌部及び端艇部合撰の結果次の二

篇を得たので、直ちに中村良之助講師に依頼して譜の新作を乞ひ部員一同バック臺練習に怠らざる猛練習を續けて居る。来る秋の競漕場裏關大の一名物となる事であらう。

一等當選歌 作者 山崎新之助(經二)

一、山は千里の縁が丘に
我れ等關大育くむ母校
川は大淀流れは清く
我れ等がクリュー其の名は高し

二、胸はくろがれ我れ等が力
うまず鍛えし覇氣をば示し
身には白衣が我れ等が心
見ずや雄雄しき正氣を示す

三、馳せては早く衆敵空し
熱血わきぬ真紅を燃えて
夕陽赫く譽は高し
優勝われら青春正に

四、山は千里の縁が丘に
我れ等關大育くむ母校
川は大淀流れは清く
我れ等がクリュー其の名は高し。

二等當選歌 作者 宇津原砂(法三)

一、水の都の名を誇る
淀の流れにさんざめく
情緒にむせぶみほじるし
いついつ迄も懐かしめん

二、ももじり波に黄昏れて
嘆く胸の思ひ出を
古城のはざりまさよへば
わけて悲しき夏の陣

三、嗚呼五百年戦國の
治亂の嵐定まりて
乙女の情ほこるびて
水の都の宵の灯や

四、古城の斜陽を見る
涙か密し天の川
我れ等の艇に傳説の
戀を傳へていざ漕がん

五、おゝ水の子よさらばいざ
熱血もゆる鐵腕に
生命を込めて五大洋
漕ぎて誇らん千里山。

千里山俳壇

朝冷選

經一 辰巳南甫

飼犬の脱毛搔きやる春名殘

花見人三乗り合ふ當錢蕪哉

花の雨しきりに筏行く日也

傘さして瀧へ下り行く花の冷

子規小雨を呼びて鳴きにけり

山吹の咲ける貸家を覗きけり

背の山に雨晴れ急ぐ子規

雨さなりし山の泊りや若葉寒

五月雨の明るきに出す机かな

五月雨の軽るき響きの夢に入る

山科の荷古りぬ五日雨

明易き練兵場のボブラ哉

賽錢の沈む地蔵の清水哉

山蟻の浮びし清水掬ひけり

瀧道や風に聞ゆる若葉笛

山若葉石切る音の聞えけり

澤の雨蛙の遠音折りくす

朝露に日のきらめける穂麥哉

鶴鶴の羽根光りけり者葉風

朝風に御山晴れたる若葉哉

學校の窓掛白き若葉かな

友禪を洗ふ若葉の流れ哉

雨晴れて若葉明るき山路哉

佐後淳一郎

無花果の廣葉に風や夏に入る

麥秋や夕明りして桂川

(第二四頁へ續く)

千里山歌壇

編輯局選

△ 放 心

大木原健司

草の穂のゆらぐと見れば浪華野は忽ち白き雨過ぎにけり

△ 水無月例會

(詠草の中より)

佐藤淳一郎

花散りてしげしは山吹の濃き緑葉も寂しまれぬ

△

松本武

事に會ひ折に觸れては出て來つる人の心の誠ぞうれし

△

稻村金藏

ほのぼのの白む窓邊に見るころにつかれて結ぶ夏のあさ夢

△

新町徳之

徐ろにまぶたを明けて先生といへりし聲の力なき哉(北田君の奇禍)

△

新宅望洋

投げやりて鉄の一片をうばひあふ緋鯉の群に夕日照るなり

△

奈真にて

ありけらし昔は知らずかくてあれば奈真はさみじり深みざりかな

△

鈴木武夫

六月の眞陽背に受けて里の子等嬉嬉と戯れ川渡り居る

△

桐

緑葉のゆらぐが中にいささしく丘の傾斜に桐の花咲く

△

白水生

草屑根のさびも見へたり五月晴れ桐の花枝さしものぞきて

(第二頁より續く)

大杉の暗き日かけの花穂

The Kansai University Bulletin

Published Monthly By

The Kansai University Press

No. 51

July, 1927.

LEADING FEATURES OF CONTENTS

On Municipal Industries.....Dr. Seki, Mayor of Osaka.
Mathematical Symbols.....Mr. S. Kawamura, Lecturer of the University.
University News—Visit of His Excellency the French Ambassador M. de Billy—Inauguration of the Society for the Study of German Kultur—The Fifth Summer Course of Foreign Languages.
Alumni News.—Mr. O. Takei, Alumnus.
Students' Activities.
Miscellanea—Notes on Literary Exercises by Students.
Illustrations—His Excellency the French Ambassador M. de Billy's visit to the University—H. Exc. M. de Billy, French Ambassador—Cambridge, Trinity College Library—A scene of a French Comedy "Anglais tel qu'on le parle," by Tristan Bernard—A Meeting hold in Commemoration of the 5th Anniversary of the Publication of the University Bulletin—Mr. E. Bischoff, German Consul in Kobe—Lieutenant—Colonel Takahashi, Newly appointed for the University—Mr. O. Takei, alumnus—Students visiting the Imperial Mausoleum of Emperor Korei—A Touring Club of Students—Wakayama Normal School boy winning the Day at the Inter-Secondary School Wrestling Contest—The Inter-Secondary School Jujutsu Contest—A Equestrian Club of Students—The Inter-varsity Oratorical Meeting—A Scene of "Hamlet."

製複許不

大正十一年六月十五日創刊
昭和二年七月十三日印刷
昭和二年七月十五日發行

編輯兼發行人 宮島綱男

印刷者 飯田彌之助

印刷所 三有社

發行所 關西大學學報局

關島學舎 關西大學

千里山學舎 關西大學

大阪府東淀川區十三橋南岸
有田朝冷宛
□封皮には必ず「千里山俳句」を朱記の事

關西大學專門部補缺募集

募集學年

法律學科第一學年
經濟學科第一學年
商業學科第一學年
文學科第一學年
修業年限各三ヶ年

志願者心得

出願期間 八月二十日ヨリ九月三日マデ
試験期日 九月六日(學科試験)
九月十日(人物試験)
詳細 返信料封入左記へ照會ノコト

大阪市此花區上福島

關西大學

電話土佐堀(一五〇七四番)

千里山學報創刊五周年

記念懸賞論文募集

一 應募資格 本學學部、大學豫科及び專門部學生に限る。
二 論文種別 法律、政治、經濟、商業、文學に關する學術論文に限る。
三 論文分量 十行二十二字詰原稿紙三十枚以内に限り。
四 締切期日 昭和二年九月末日限り。
五 審査 論文審査は本學專任教授並に講師に委嘱す。
六 發表期日 審査の結果は昭和二年十一月十五日附發行千里山學報誌上に於て發表す。
七 當選者 論文の優秀なるもの十篇を選び賞品を授與す。尙ほ當選論文は發表後毎月一篇乃至二篇宛千里山學報に掲載す。
八 送稿先 右締切日までに到着するやう大阪市福島關西大學學報局宛郵送又は持參すること、尙ほ封皮に「懸賞應募」を朱書するを要す。
九 備考
イ 文體は隨意なるも假名はいろは假名を用ひ墨又はインクにて明瞭に記載すること。原稿には必ず論題及び應募者の部、科學年並に氏名を明記すること。
關西大學學報局

注意 前號に於て論文分量を原稿紙十五枚以内とせしめるは三十枚以内の誤に付訂正す。

科別
會期
授業時間
會場
英語科、佛語科、獨語科(但英語科ハ中等學校卒業以上ノ素養アル者ヲ收容シ他ハ初學者ヲ收容ス)
昭和二年七月二十日(水)ヨリ八月十日(水)マデ
午後六時ヨリ同八時マデ
關西大學福島學舍(但市電淨正橋筋停留所下車北へ約二丁)

關西大學第五回夏期語學講習會會員募集

聽講者
講師
特權
照會
男女ヲ問ハズ入會スルコトヲ得(女子多數ナルトキハ別ニ女子部ヲ設ク)
關西大學專任教授並ニ講師
英語科修了者ニハ關西大學專門部入學試験ノ語學試験ヲ免除ス
詳細ハ口頭又ハ書面ニテ此花區上福島關西大學宛照會スベシ(返信ヲ要スルモノハ返信料添付ノコト)



富士絹ワイシャツ

ミスミ貿易商會内地部

神戸市下山手通二丁目角
電話 葺合一六〇九番
振替 大阪八〇七三六番

特 價 提 供

特 徴

- △値段は……市價より三割安い
- △耐久力は……普通品の四倍
- △生地は……純輸出合格品
- △仕立は……優美堅牢
- △使用は……春夏秋冬に適す

定 價

- ワイシャツ 生地大巾一尺
- A 號 參圓八拾錢……參拾七錢
 - B 號 四圓四拾錢……四拾參錢
 - C 號 四圓八拾錢……四拾八錢
 - D 號 五圓貳拾錢……五拾四錢
- 但シ替カフス付は五拾錢増

特 典

本學校友學生其の他關係の方には
定價より五分引
運賃弊店負擔

御注文はハガキで

ワイシャツはカラーのインチ
生地は大巾何尺
最寄郵便局名

代金支拂方法

引換郵便にてお送り致します



脚氣

に防禦と療治の

パラストロン

●浮腫性脚氣 にはパラストロンを用ゆれば頗る快速に奏効し、先づ心悸亢進、胸内苦悶を鎮静せしめ浮腫を去り一般症状を緩解す。

●麻痺性脚氣 パラストロンの持續投與により知覺障害、運動障害を漸次減退し歩行困難を去る。

●心臓性脚氣 パラストロンの最大量を皮下注射及内服せしむるを要す然して本品の連用により急性症状を消散し治癒せしむ。

(包裝) 皮下注射用 内服液劑 全粉末 全錠劑

パラストロンに關する説明書
並に醫家實驗報告集無代進呈

發賣元

大阪市道修町
株式會社 堀野義商店
東京出張所 日本橋區大傳馬町一丁目

P



—へ山—へ海 —へ越三づ先

お花畑の色や香や、青海原の沙
風に、夏を唯一の楽しみ、登
山や海水浴のシーズンが参りま
した。ヘルメットにアルペン
トック、キャンプの用意も凛々
しく、さては男波女
波に戯むる肌涼し
き海水浴の軽きいで
たち—と、愉快さまる用具
のかすくは三越の四階に豊富
に揃ひました。海へ—山へ—
—あこがれのお仕度は先づ三越
へ—。



三越呉服店

◆ 阪 大 ◆